

## 東アフリカ牧畜社会における横断的紐帯の持続

佐川 徹

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)

### Persistence of Cross-Cutting Ties in East African Pastoral Societies

SAGAWA, Toru

Kyoto University

Previous studies focusing on inter-ethnic relations in East African pastoral societies have shown various trans-ethnic cross-cutting ties. Some researchers have implied that amicable and flexible relations among members of different ethnic groups have been replaced by hostile and inflexible relations because of the encroachment and domination by colonial powers, which began in the late 19th century. However, my research in 2006 indicates that the Daasanach have kept many cross-cutting ties until now.

The Daasanach are agro-pastoralist in southwestern Ethiopia and north-western Kenya. Six other groups inhabit the areas surrounding the Daasanach. Of these, the Kara and the Hor have maintained friendly relations with the Daasanach and are classified as “our people” (*gaal kunno*). In contrast, other four groups are “enemies” (*kiz*).

The Daasanach have kept various individual cross-cutting ties, not only with *gaal kunno*, but also with *kiz*. These ties have contributed to people’s survival in an uncertain environment. They have constructed and maintained a local network of food security through the trans-ethnic movement of residences, goods, and members. In addition, amicable trans-ethnic communication provides an opportunity for the “socially weak” to escape from invisible violence in the community and a place where they can rebuild their lives.

Researchers’ tacit assumptions may misrepresent the realities on the ground. One assumption has been that government-imposed borders inevitably diminish mutual visits and friendly relations among neighboring ethnic groups. Another assumption is that as towns and markets are established by the government and large amounts of goods are introduced from the outside world, trans-ethnic transactions will come to an end. Both assumptions are partly true. On the other hand, people sometimes intensified cooperation with *kiz* in order to resist arbitrary boundary making by the government. People also use goods from the outside world to exchange or give within the trans-

---

**Keywords:** Inter-ethnic relation, Cross-cutting ties, Friendship, Kinship, Daasanach  
キーワード: 民族間関係, 横断的紐帯, 友人, 親族, ダサネッチ

ethnic friendly network. Although the way of cooperation and the goods which people transact have been affected by outside influences, the social significance of cross-cutting ties has persisted.

- I. はじめに 1 問題の所在 2 ダサネッチ
- II. 歴史的背景
- III. 横断的紐帯の諸相 1 共住 2 交易
  - 3 友人関係 1) 関係の概要 2) 地域集団と相手民族 3) 関係形成の契機と贈与財 4) モノのやりとりの特徴 5) 関係の発展 4 親族関係 1) 通婚 2) 養子

- IV. 横断的紐帯が形成される背景 1 生態環境 2 多言語状況 3 個人中心の社会関係 4 生活様式の共有 5 相互往来による情報伝達

V. 考察

VI. おわりに

## 1. はじめに

### 1 問題の所在

エヴァンズ＝プリチャードによる『ヌエル』[Evans-Pritchard 1940]が1940年に出版されて以降、東アフリカ牧畜社会を対象とした人類学的研究においては、構造機能主義的分析枠組みに依拠した民族誌が生産された[Lewis 1961; Spencer 1965など]。それらの民族誌の中心的テーマは、外部に対して閉じた自律的な集団内部における生業様式と社会－政治構造の共時的な様態を精緻に描き出すことで、「国家なき社会」における秩序維持の仕組みを明らかにすることであった。

この潮流に対して、1970年前後から単一の民族単位を超えて広がる社会関係の存在に注目した研究が登場してきた。それらの研究が焦点を当てた社会関係は、大きく二つに分けることができる。一つは戦争や家畜の略奪行為などの敵対的な社会関係である<sup>1)</sup>。もう一つは交易や友人などの友好的な社会関係、つまり民族境界を越えた横断的紐帯(cross-cutting ties)[Gluckman 1956; Schlee 1997]である。

日本では、富川が「協同であれ対立であれ、

また、支配であれ服従であれ、あるいは孤立ですらあっても、部族関係をぬきにした一箇の部族社会は、ありえない」[富川 1966: 468]という認識に依拠して、タンザニア北部のダトーガと近隣民族が交易や儀礼の共催などをとおして「多部族的共生社会」[富川 1966: 494]を形成していることに、先駆的に焦点を当てた。

欧米では、ケニア北部のウシ牧畜民サンプルとラクダ牧畜民レンディーレが、家畜や女性の移譲をとおして連帯関係を形成していることを明らかにしたスペンサーの著作[Spencer 1973]、エチオピア南部からケニア北部にかけて広がる東クシ系諸民族において、歴史的にクランが民族という範疇に先立つこと、また今日でも民族境界を越えて共通のクランが存在し民族間関係の動態に影響を及ぼしていることを示したシュレーの著作[Schlee 1989]、北東アフリカにおいて年齢組織などの組織原理やダンスなどの文化的要素が民族境界を越えて共有されていることを「共鳴(resonance)」と呼び、それが民族を異にする成員間の相互行為において重要な役割を果たしていることを指摘した論文集[Kurimoto & Simonse 1998]が、そのおもな成果である。

1) この地域の民族間紛争と近年の変化に焦点を当てた先行研究は、佐川[2009a]で整理した。

彼らがおもに社会組織に注目したのに対して、より個人的な関係に注目したのがソバニアである。彼は、現在トゥルカナ湖周辺に暮らす諸民族の口頭伝承の分析から、19世紀の初めから終わりにかけて、民族を異にする成員のあいだに多くの友人関係 (bond partnership) が存在しており、それが民族間の交易に重要な役割を果たしていたことを明らかにした [Sobania 1980]。彼の研究を受けて、何人かの研究者はこの地域の現在の友人関係に焦点を当てた研究をおこなっている [松田 (凡) 2003; Tadesse 2005; Girke in press]。

スペンサーは上記のいくつかの研究にも依拠しながら、「牧畜連続体 (pastoral continuum)」という概念を提出した [Spencer 1998]。これは牧畜という生業やそれに依存した生活を送る人間集団が、それ自体で完結した生業様式や社会編成ではないことを強調するために提出された概念である。これまで牧畜民は、「ウシ文化複合 (cattle complex)」 [Herskovits 1926] ということばにつきまとう「文化的理由から家畜に執着する非合理的な人びと」というイメージや、一般に広く流布した「排他的で好戦的な人びと」というイメージに覆われてきた。その傾向に対してスペンサーは、牧畜民は歴史的に農耕や狩猟採集、漁労などほかの生業を柔軟に渡り歩いてきたし、近隣集団とは対立を抱えながらもより柔軟で相補的な関係を築いてきた事実を示すことで、牧畜社会の「伝統」がより弾力性 (resilience) に富んだものであることを強調したのである。

もっとも、多くの論者はそのような牧畜社会の「伝統」は19世紀末以降の国家勢力の侵略と支配によって解体され、かつての柔軟で友好的な民族間関係は固定的かつ敵対的な関係に取って代わられていったことを示唆している。たとえばランフィアは、現在ケニア

北西部に暮らすトゥルカナが、歴史的にほかの集団の成員を包摂しながら形成されてきた過程を示したあとで、つぎのように述べる。

しかしこのような流動性は、植民地時代には失われる運命にあった。トゥルカナの〈英国植民地軍に対する：引用者〉敗北に引き続いて創設された行政区は、単一的な「部族」によって作りだされた民族アイデンティティの固定的な概念に基づいており、これによって外部者が「トゥルカナになる」ことは不可能となった [Lamphear 1993: 101]<sup>2)</sup>。

またエチオピア西南部の民族間関係について、宮脇も似通った主張をしている。

二十世紀初頭にこの地域一行で行なわれていた帝国統治をみるならば、十九世紀に機能していた民族間を結ぶ多様な紐帯のシステムが、このときに破壊され、別なものに変質していたことが分かるはずだ [宮脇 2006: 266]。

十九世紀に存在した民族間の紐帯はレイディング〈家畜の略奪などを目的とした武力攻撃：引用者〉により、まず国境線に沿って切断され、次いでエチオピア国内の州境にそって切断された。さらに高地からの交易による銃の流入が、民族間の紛争を激化させた [宮脇 2006: 461-462]。

このような「消滅の語り口」は、松田 (素) [1999. 2000] のことばを借りれば、国家勢力の介入によってこの地域の集団編成が「ソフトな民族」から「ハードな民族」へと不可逆的に転化したという認識に依拠している。松田 (素) によれば、植民地化以前のアフリカは「ソフトな民族」によって構成されていた。これは、「生活共住集団をゆるやかに東

2) トゥルカナについては、ブロッホデューも同様の指摘をしている [Broch-Due 2005: 8-10]。

ねる形で……形成されていたが、それは他者を鷹揚に受容し、みずからも自在に転出していく」[松田(素)2000:60]ように編成された集団であった。しかし植民地支配の過程で、このような集団境界の流動性や個人の帰属意識の多元性は否定され、「単一の固定したアイデンティティに全的に帰依する」成員によって構成される、「言語・文化的に均質化され政治的にも統合された」集団が創出された。松田(素)[1999:105]は、これを「民族のハード化」と呼ぶ。

大局的にみれば、東アフリカ牧畜社会でもこのような事態が進化したといえるだろう。しかし、この認識や語り方はいくつかの問題も残る。一つは、それが植民地化以前には民族間に敵対的な相互行為が現れる局面がなかった、あるいはあったとしても最小限度のものでしかなかった、という印象をつよく与えてしまう点である。しかし後述するように、国家勢力からの影響が民族間の敵対関係を強化させたことは確かだとしても、国家勢力との接触以前に「紛争のない平和的な地域社会」が存在していたわけではない。

二つは、「外部から否定的影響を与える介入がなされてきた」ことのみを根拠に、民族境界を越えた友好関係が切断されたことを自明の事実とみなしている点である<sup>3)</sup>。「消滅の語り口」を採用している論考の多くは、口頭伝承や探検家による記述、政府アーカイブス資料などに依拠した歴史研究である。そこでの議論は、ほぼつぎのように進められる。(1)口頭伝承などによって「植民地化以前には友好的な関係があった」ことを明らかにしたうえで、(2)アーカイブス資料などを用いて「植民地化以降、民族間関係に否定的影響を与える介入がなされてきたという事実」を

指摘し、(3)その結果として友好的な関係が切断されたことが「事実」として述べられる。ここで問題なのは、現在そのような友好関係が実際に消滅してしまったのか否かに関して、実証的なデータ分析がほとんどなされていない点である。

これら先行研究の問題点を考慮して、本論では農牧民ダサネッチと近隣民族の関係を対象に、民族境界を越えた横断的紐帯が、外部世界からの否定的影響にもかかわらず今日まで維持されていることを定量的データに基づいて明らかにし、それが現在まで形成され続けてきたこと背景にある諸要因を分析することを目的とする。同様の試みは、松田(凡)[2003]がダサネッチの北方に暮らすムグジと近隣民族との友人関係を対象におこなっているが、本論では、友好関係を共住、交易、友人、親族の四つに分類して相互の関係についても示すことで、関係の総体を検討する。さらに、横断的紐帯の持続を示すことが、近年対象地域で本格化しつつある平和構築介入の適切なあり方や、対象地域の民族間関係を敵対関係も含めて総合的に分析する際に、重要な視座をもたらすことを指摘する。

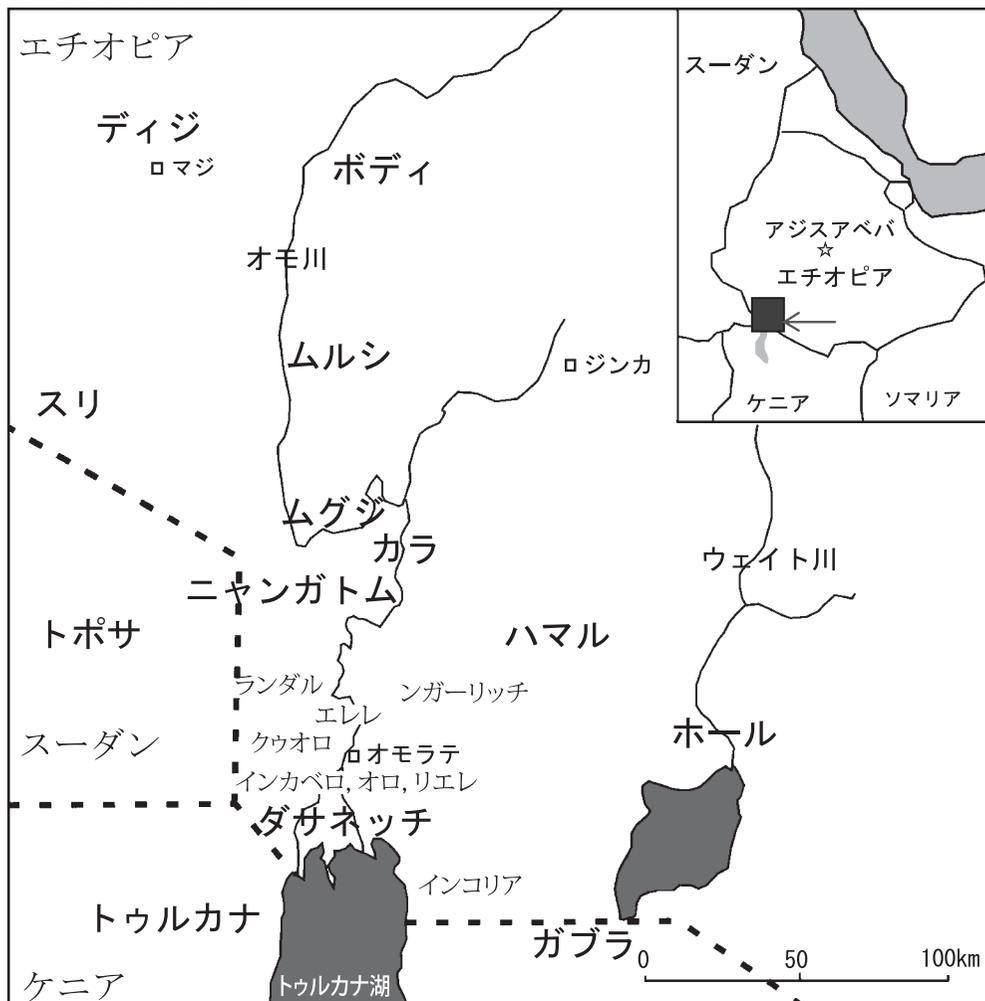
## 2 ダサネッチ

ダサネッチは、エチオピア、ケニア、スーダンの三国国境地域に暮らす東クシ系の集団である(図1)<sup>4)</sup>。この地域は、三国の首都すべてから700キロ以上はなれた国家の最周縁地域である。1980年代後半に小さな町オモラテが建設されて以来、次第に市場経済化が進みつつあるが、現在でも大部分のダサネッチは村に暮らして自給的な生活を送っている<sup>5)</sup>。

ダサネッチの近隣には6つの民族集団が

- 
- 3) もっとも松田(素)[1999:120-124]は、植民地政府による「ハードな民族」の創出以後にも、「ソフトな民族」原理に基づいた民族生成がおこなわれていることを指摘している。
- 4) 本論で用いるデータは、おもに2006年2～9月の現地調査で得たものである。
- 5) エチオピアの2007年人口統計によれば、ダサネッチの人口は48067人であり、うち都市地域に暮らすのは1481人に過ぎない[Population Census Commission 2008:84]。これに加えて、ケニア側にも数千人のダサネッチが居住している。

図1. ダサネッチと周辺地域



ダサネッチ: 民族集団名. インカベロ: 地域集団名. ロオモラテ: 都市名. - - - -: 国境

暮らしている (図1)。ダサネッチは、それぞれ北部と北東部に暮らすカラとホールを、友好的な関係を維持する「われわれの人びと (*gaal kunno*)」に分類する。それに対して、南西に暮らすトゥルカナ、北西のニャンガトム、北東のハマル、南東のガブラは、戦争の対象となる「敵 (*kiz*)」である。彼らはいずれも家畜飼養につよく依存し、移動性の高い生活を送る集団である。次章では、ダサネッチという民族の生成過程と国家勢力との接触

後の民族間関係の変容を簡潔に記そう。

そのまえに、近隣民族との関係にも影響を及ぼすダサネッチの生業について触れておく。ダサネッチは、高度400メートル前後、年間平均降水量363ミリ<sup>6)</sup>の半乾燥地域に暮らしている。一年には二回の雨期があり、3～5月にかけては大雨期、10～11月にかけては小雨期となっている。もっとも、降水量は年ごとに不安定である。たとえば、1997年の年間降水量は808ミリであったのに対し

6) ダサネッチランドの中北部に位置する町オモラテの1996～2000年の平均年間降水量。降水量のデータは、オモラテの農業省の資料によっている。ただし2000年のデータは12月を除く。

て、2000年（12月を除く）にはわずか72.5ミリであった。

ダサネッチの生業活動は、降水量だけではなく彼らの居住地域の中央を流れるオモ川の水位の変動からも影響を受ける [Almagor 1978: 36-59]。川は5～6月ごろからエチオピア高地の降雨を受けて増水を開始し、一部の地域では7月ごろに河岸を越えて氾濫し平野を水が覆う。水は8月ごろから引き始め、10月ごろにはほぼ引き終わる。

ダサネッチはおもに牧畜と氾濫原農耕、漁労に従事している。飼養している家畜はウシ、ヤギ、ヒツジ、ロバと少数のラクダである。これらの家畜は、複数の群れに分けて管理される。ミルクを供するメス家畜の多くは、オモ川周辺の定住集落付近でその幼い子供たちとともに通年放牧される。それに対して、去勢家畜の多くは10～2月ごろまでオモ川の氾濫原付近で放牧されたあと、3月の大雨期の訪れとともにオモ川から離れて、良質の草が生長している高度の高い放牧地へと移動させられる。これらの土地には、降雨によってできた大きな水たまり (*hero*) や季節的河川 (*ille*) が存在している。この時期には、男性の若者が中心となって家畜キャンプ (*foritch aaniet*) を設営し、頻繁な移動をくり返す。

移動を決定する主要な要因は、水と牧草の分布状況である。1960年代後半にダサネッチの調査をおこなったアルマゴールも記しているように [Almagor 1978: 46-48]、ダサネッチは牧草の状態を3つに分類している。3月の大雨期から5月ごろまでは緑色 (*gireb*) の牧草が生えており、これは「ギレイの草 (*ish girey*)」の状態と呼ばれる。また、5～6月ごろの緑色と黄色 (*raar*) の牧草が入り混じった状態は「モルゴッチの草 (*ish morgoch*)」、小雨期の直前の7～9月ごろの牧草がほぼ枯れてしまった状態は「シャンテ

の草 (*ish shante*)」と呼ばれる。牧草の状態は、季節差のみによって規定されるのではなく地域差からも大きな影響を受ける。たとえば、8月になってある場所では牧草がシャンテの状態になってしまっても、ほかの場所ではまだギレイやモルゴッチの状態にあることもある。牧夫は、その時々の情報収集や過去の経験に依拠しながら、より良質な放牧地を求めてつぎの移動先とその時期を決定する。一回の移動距離は、数百メートル程度のときもあれば、10キロ程度におよぶこともある。

家畜キャンプがオモ川から離れるにしたがい、同じく家畜とともに移動する近隣民族の成員と遭遇する機会が増える。そのような遭遇を契機に、彼らとのあいだに交易や共住などの友好的な相互行為が生まれる場合もあるし、逆にその際に発生した小さなトラブルがきっかけとなって、民族間に暴力的紛争が発生することもある。トラブルが発生すると、ダサネッチはオモ川近くの定住地付近まで家畜とともに撤退し、敵からの襲撃に備える。

つぎに氾濫原農耕について触れる。オモ川の氾濫水はエチオピア高地から肥沃な土壌を運んできて、土地の生産力を上げる。平野に達した水が引くと人びとはそこにモロコシやトウモロコシなどを播種し、除草や鳥追いなどの作業を経て、一回目の収穫 (*oldim*) は11～1月ごろにおこなわれる。一回目の収穫後に切り株からのひこばえ (新芽) が結実し、2～3月ごろに二回目の収穫 (*gabushe*) ができる。定住集落の1世帯で食事の品目構成を調査したところ、収穫を終えたばかりの4月には69% (N=56)、乾季の盛りの8月にも38% (N=34) を、自給したモロコシが占めていた。半乾燥地域であるにもかかわらず、この地では氾濫原の恵みによって豊かで安定した穀物生産が可能となっているのである<sup>7)</sup>。

7) オモ川上流部には、2006年からギベ第三ダム (Gibe III) が建設中であり、2011～12年に完成予定である。このダムの建設工事と稼働は、ダサネッチを含めたオモ川下流平原に暮らす人びとの生業活動に多大な負の影響を与えることが懸念されている [Hathaway 2009]。

後述するように、ダサネッチの近隣に暮らすいくつかの民族は、作物生産を不十分かつ不安定な天水農耕のみに頼っている。そのため彼らは干ばつに見舞われると、氾濫原で生産された穀物を求めてダサネッチの地を訪れる。この生業様式の差異が、民族間の相互往来を促進する一つの背景として存在している。

エネルギー摂取のうえで、牧畜と農耕はどちらも欠かすことができないが、ダサネッチは近隣の農牧民と同じように、みずからを「家畜の人びと (*gaal aaniet*)」と位置づけ、とくにウシにつよい文化的価値を置いている。少年たちは土でウシの人形を作り、その角をたがいに突き合わせながら遊び、青年たちはたがいを「去勢牛の名前 (*yier miti*)」で呼び合い、自分が気に入った色と模様をしたウシ (*aani bisiet*) の唄をとにも歌う。

## II. 歴史的背景

ダサネッチは、インカベロ、インコリア、ンガーリッチ、エレレ、オロ、リエレ、ランダル、クッオロの8つのエン (*en*) と呼ばれる集団から構成されている (図1)。エンは多くの儀礼の共催単位であるとともに居住地域や放牧地をある程度共有していることから、地域集団と呼ぶことができよう。

各地域集団は、それぞれに起源とする場所が異なる<sup>8)</sup>。たとえば、現在人口的にも政治的にもダサネッチの中核を占めるインカベロとインコリアは、もともとシールという一つの集団であり、現在のダサネッチランドからみて西南の方向にあるゲルあるいはゲリオという地に居住していた。現在の居住地へ移動する原因となったのは、ゲリオの地を干ばつが襲ったこと、またそれによって当時シール

に隣接して住んでいたクッオロ<sup>9)</sup>とのあいだに放牧地をめぐる争いが生じたことであるとされる。

当時シールの年長であった集団はニューベという名で、年少の集団はガビテという名であった。クッオロの攻撃により、前者は南方へと逃亡し現在ケニア中西部に居住する農牧民ポコットになったとされる。後者は北方へ逃亡し、現在のケニア、スーダン、エチオピアの三国国境付近から北へと連なるラブル山脈付近をとおり、今日のダサネッチランドの北西部に位置するエチオピアのクラツ山付近にまで辿りついた。ゲリオ付近でシールの北方に暮らしていたオロとエレレも、行動をとにもした。クラツ山付近にはマルレ<sup>10)</sup>と呼ばれる集団が先住していたが、エレレの呪術者がみずからの呪術的力 (*nyierim*) によって彼らを追い払いその地を占有した。この移住の時期は、19世紀初めごろと推測される [Sobania 1980: 64-66]。

より規模の小さな地域集団ランダルとクッオロの移住過程については、ソバニアがくわしく記述している [Sobania 1980: 132-223]。現在ケニアのトゥルカナ湖南東部に住むサンプルやレンディーレは、かつてはトゥルカナ湖北東岸のワト付近を放牧地として利用しており、ダサネッチとの交易関係も存在していた。しかし、1880年代からトゥルカナ湖周辺に居住する集団に広がった牛肺疫や東アフリカ全域を覆った牛疫と天然痘、それにともなう飢饉の被害を受けて、現在の居住地付近へと南下していった。しかし彼らの一部は、氾濫原で豊かな食糧生産が可能であったダサネッチの地へと移動して、ダサネッチの地域集団になった。サンプルの一派はクッオロ、レンディーレの一派はランダルと呼ば

8) 地域集団の移住史は、ソバニアの先行研究 [Sobania 1980] と、筆者が30人のダサネッチからおこなった口頭伝承の聞き取り調査に依拠して記述している。

9) このクッオロが、現在ダサネッチの地域集団の一つであるクッオロと同じ集団なのかどうかは明らかではない。

10) これは、現在ホルの一部を構成している集団マルレと同一集団であると考えられる [宮脇 2006: 229-230]。

れるようになった。

現代の居住地付近に移動したダサネッチの各地域集団は、この地域に民族集団の境界を超えて広がっていた二つの交易ネットワークに加わった。その一つは、エチオピア中南部のコンソで生産された衣服やビーズ、鉄製品、コーヒー、土器をホール経由で穀物と交換に得るルートであり、もう一つはハマルに隣接するバシエダで生産された鉄製品や土器を、穀物や小家畜と交換にカラとハマル経由で得るルートであった [Sobania 1991: 125-127]。

このような友好関係に加えて、近隣民族とのあいだには敵対関係も存在しており暴力的紛争も発生していた。たとえばオモ川の西岸から東岸へ移動したシールの一部は、19世紀末にトゥルカナ湖の北東岸付近に位置するシリを放牧地として利用していたガブラを襲撃し、自己の領域を拡張した。

以上簡潔に述べたように、ダサネッチの各地域集団は、かつての居住地での干ばつや紛争などを契機に現在の居住地への移住を開始した。移住の過程では、先住していた集団を呪術や物理的暴力の行使によって追い払い、新たな居住地を確保した。そしてオモ川周辺に暮らし始めた彼らは、外部からの移住者をダサネッチ内に包摂するとともに、近隣民族とのあいだに交易や友人関係などの友好的な、またときには暴力的紛争などの敵対的な相互行為をくり広げていた。

国家からのさまざまな介入は、このもともと存在していた敵対関係を強化させてきたものとして、捉えるべきであろう。そのことは、国境をはさんで隣接するダサネッチとトゥルカナの関係によくみてとれる。ダサネッチが国家権力と本格的に接触したのは19世紀末であった。彼らは、銃で武装したエチオピア帝国軍によって軍事征服され、1907年の国境画定でその大部分の土地はエチオピア領に包摂された。すると、彼らは帝国から派遣さ

れてきた役人と結託して、家畜や奴隷を略奪するために英国植民地下のトゥルカナをくり返し攻撃したとされる [Hickey 1984]。

両者の対立が決定的なものとなったのは、エチオピアがイタリア占領下に置かれた1936~41年にかけてである。この時期ダサネッチは、「イタリアの人びと (*gaal taliyaan*)」、つまりイタリア軍の国境防衛部隊として活動し、英国軍に加わった「イギリスの人びと (*gaal inglis*)」、つまりトゥルカナと激しい銃撃戦をくり返した。イタリア軍が撤退して帝政が復歸すると、この地域への中央からの干渉はむしろ弱まって放置状態に置かれたとされるが [宮脇 2006: 322]、その後も今日にいたるまで両者は激しい戦いを重ねている。

この中央からの放置は、地域に広く銃が流通することに貢献した。銃は帝国軍の侵略前後から、北部からのエチオピア人商人によってこの地にもたらされた。イタリア占領時代にはイタリアが無償で大量の銃をダサネッチに贈与し、イタリア撤退後はイタリアが廃棄していった銃がこの地域に出回った。さらに、1980年代からは近隣諸国の政権変動にともない拡散した自動小銃が流通した。2006年現在では成人男性 (N=163) の約48%が銃を所有しており、そのうちの87%は自動小銃を所有している。

ダサネッチ語で戦争と訳せる語はオース (*osu*) という語である。これは「数百名程度で構成される組織化された戦い」を意味しており、成人男性 (N=174) 一人あたり平均3.4回のオースに出向いた経験がある。組織化の度合いが低い小規模な襲撃 (*sulla*) はより頻繁に発生している<sup>11)</sup>。近年起きた近隣集団との大規模な戦争では、死傷者が百名を超えたこともある。この地域は、国家からの介入によって民族間の敵対関係が強化され、その後中央からの放置により銃が拡散したことで、暴力的紛争が激化させられながら常態化した

11) ダサネッチと近隣民族との戦いについては、別稿 [佐川 2009d] を参照。

地域だと特徴づけることができよう。

しかし本論で強調したいのは、ダサネッチと「敵」は激しい戦いを続けてきたにもかかわらず、戦争が終わると自発的に相互往来を再開して、個人的な友好関係を現在まで形成し続けてきた点である。次章では、今日まで続く民族境界を越えた横断的紐帯を具体的に示そう。

### III. 横断的紐帯の諸相

横断的紐帯は、共住、交易、友人、親族の各関係に分類することができる。以下で順番に述べていこう。

#### 1 共住

本論でいう共住とは、異なる民族集団に帰属する成員が同じ集落に住居を構えて一定期間暮らしをとともにすることである。ダサネッチと近隣民族の成員が共住するのは、おもに家畜の放牧キャンプにおいてである。

ダサネッチは、彼らと近隣民族とのあいだに明確な空間的境界は存在しないと述べる。ダサネッチ語で「境界」という概念にもっとも近いことばはガール (*gaar*) である。たとえば、平地に氾濫した水が引いたあとに、各世帯の耕作地を分けるために引く線はガールと呼ばれる。また、集落間の境界となっている特定の木やくぼみなどを指すときや、エチオピアとケニア両国の国境線に置かれた石材を指すときにもガールという語が用いられる。つまり、ガールは空間的境界の指標となる可視的な対象を指す語である。ガールを指標にした空間的境界は、社会的境界でもある。

たとえば、その畑を耕作している世帯の成員の許可なくそこに入ることは好ましからざることであり、国境の石材が、異なる統治システムを有した政治体間の境界であることを人びとは認識している<sup>12)</sup>。

それに対してダサネッチは、近隣民族とのあいだに畑や国境のようなガールはないと述べる。もちろん、地名に言及しながら「Aはわれわれの土地」であり「Bはトゥルカナの土地」であるといった言明はおこなうが、民族間に可視的な対象によって示される明確な空間的境界は存在しない<sup>13)</sup>。「われわれの土地」と「彼らの土地」のあいだにあり、おもに放牧に利用される土地は、ディエト (*dieto*) と呼ばれる。ディエトはダサネッチと近隣民族のどちらかが排他的に利用する領域ではなく、双方の成員が家畜キャンプを設営して水や放牧地を共同利用する土地、すなわち共住地である。

ディエトにおける共住は、おもに3～10月にかけておこなわれる。I章で述べたように、3月の大雨期が始まると、人びとは生長した草と水場を求めて家畜とともにオモ川周辺から離れて、やや高度の高い放牧地へと移動する。移動をくり返すにしたがい、同じく放牧地を求めて移動する近隣民族のキャンプとの位置は近づき、両者は最初に水場で出会う。すると人びとは、近くにある葉や枝などを切ってこれを掲げる (*neeti mur*)。彼らは手に持った銃を相手に向けるかわりに、「葉を掲げる」ことによって戦う意思がないことを示し、資源を平和的に利用していく意思を相手に伝達する。

放牧は毎日おこなわれる営みであるから、

12) ガールは時間的な境界を指し示すこともある。ダサネッチ語で、9～10月ごろの月は「ガールマル (*gaar mar*)」と呼ばれる。マルとは飢餓という意味である。この時期は、氾濫原農耕で収穫したモロコシが底を突き、また放牧地の草や水も不足して搾乳量は減る一方である。この月は、まさに飢餓にいたるか否かの境目である。それがこの月がガールマル、すなわち「飢餓の境界」と呼ばれる理由である。

13) 河合 [2002: 8] は、ウガンダの農牧民ドドスにおいて「ドドスの土地」ということばは用いられるが、「それは明確な境界線をもつスティックで排他的なテリトリーといったものではまったく」と記している。

彼らは毎日水場で顔を合わせることになる。その過程で両者はたがいに会話を交わし、親しくなる。するとどちらか一方が他方を自分のキャンプへと誘い、その場で食事やコーヒーなどを提供して歓待する。つぎに、歓待された側が他方を招待して同じようにもてなす。このような相互往来をくり返して親密な関係を築くと、一方が他方の放牧キャンプへ居住地を移動し、隣人 (*ollo*) としてともに生活を送るようになる。共住をしても、それぞれの家畜群は独立した家畜囲いに入れられるのがふつうである。しかし放牧時には「種牛を一つ (*aaro tikidi*)」にすること、つまり朝に家畜を放牧に出す際にキャンプのそばで双方の群れを一つにし、ともに放牧へ向かうようになる。

共住していた地域の水や牧草が尽きてくると、ともに新たな放牧地へと移動することもある。しかし、ダサネッチはオモ川の氾濫が引く9～10月ごろには再びオモ川付近へ移動するため、隣人関係は解消される。

## 2 交易

ダサネッチは、「敵」をふくむ近隣の6つの民族すべてと交易関係を持つ。もっとも、市場など交易のための特別な場所はなく専門の交易人も存在しない。人びとは、モノの交換を目的として相互の居住地を個人、あるいは数名程度で往来している。

筆者は、ダサネッチが近隣民族との交易をとおしていかなる財をどれぐらい得ているのかを明らかにするために、50軒の世帯を対象に家財道具の入手先を調査した。その結

果、34軒の世帯が近隣民族から交易をとおして入手した道具を所有していることが明らかになった(表1)<sup>14)</sup>。もっとも多くの世帯が所有していた財は土器であり、19軒の世帯が所有していた。そのほかバター入れ(16軒が所有。以下同じ)、ミルク入れ(16軒)、ウシの皮(11軒)、小家畜の皮(9軒)などを所有していた。

また50人の既婚女性を対象に、そのとき身に付けていた装身具の入手先を調査したところ、41人が近隣民族から入手した装身具を身に付けていた(表2)。たとえば、34人の女性が近隣民族から得たビーズを首にかけており、13人が鉄製の腕輪か脚輪を、9人がアルミ製の腕輪を付けていた<sup>15)</sup>。

ダサネッチが近隣民族の成員から入手する財のほとんどは、ダサネッチがみずから生産、加工することが可能であるが生産量が少ないモノ<sup>16)</sup>、あるいは近隣民族が生産したモノのほうが品質がよいモノである。たとえば、ダサネッチもミルク入れなどの道具やビーズの首飾りなどの装飾品の加工や製作をおこなうが、優れた技術を有するハマルやトゥルカナなどが製作したモノのほうが高品質なため、交易で入手する。

調査対象となった世帯と女性が所有していた全道具、装身具類164組<sup>17)</sup>のうち、トゥルカナから入手したものが72%、カラとハマルが各12%、ニャンガトム2%、その他2%であった。これは筆者が調査対象とした世帯や女性の居住地が、おもにトゥルカナに近接した地域であったことが影響していると考えられる<sup>18)</sup>。聞き取りによれば、ハマルに隣

14) この表には贈与や略奪など、交易以外の方法で得た財は含まれていない。表2も同様。

15) 一人の女性が複数の民族からビーズなどを入手している事例があるため、この数値は表2の合計値とは一致しない。

16) ただし土器は例外である。ダサネッチは土器の製作技術を有していない。

17) 「組」と記したのは、同じ民族から同じモノを2つ以上得ている場合は、1と数えているためである。たとえばトゥルカナから得たビーズの首飾りを4つ所有している場合はトゥルカナ=1として、またハマルとトゥルカナから得た首飾りを2つずつ所有している場合ハマル=1、トゥルカナ=1として数えている。

18) 調査対象世帯と女性が帰属する地域集団は以下のとおりである。インカペロ29人(あるいは世帯、以下同じ)、ランダル12人、クウォロ4人、エレレ2人、オロ2人、リエレ1人。

表 1. 近隣民族から得た家財道具

道具名	トゥルカナ	ハマル	カラ	その他	合計
土器		8	10	1 (アリ)	19
バター入れ	16				16
ミルク入れ	16				16
ウシの皮	6	5			11
小家畜の皮	7	2			9
ミルク／バター入れ	8				8
ナイフ	2	2			4
鍋 (ケニアで販売)	4				4
槍	2			1 (トボサ)	3
木製の筒	1				1
ロバにつける道具	1				1
グラインドストーン	1				1
魚網	1				1
いす	1				1
合計	66	17	10	2	95

表 2. 近隣民族から得た女性の装身具

身体装飾品	トゥルカナ	ハマル	カラ	ニャンガトム	その他	合計
ビーズ <sup>1)</sup>	33			2	1 (トボサ)	36
鉄製腕輪／足輪	6	1	8	1		16
アルミ製腕輪	8	1				9
プラスチックビーズ <sup>1)</sup>	3			1		4
プラスチック首飾り	2		1		1 (ホール)	4
合計	52	2	9	4	2	69

<sup>1)</sup> 首飾りや腕輪などを含む

接した地域ではハマルの、ガブラに隣接した地域ではガブラの財が多く所有されている。

もっとも調査対象とした地域はトゥルカナだけではなく、ニャンガトムやカラとも近接しており、上記の数値は、ダサネッチが求める財を各民族がどれだけ所有しているのかを示した数値として考えることもできる。ダサネッチは、トゥルカナが「手を知った人びと (*gaal gil og*)」、つまり道具の製作技術に優れた人びとであり、また小家畜 (ヤギとヒツジ) を多く所有する好ましい交易相手であると語る。これに加えて、トゥルカナはケニア側に暮らしており、エチオピアでは手に入らないビーズや鍋などを有していることも、彼らを魅力的な交易相手としている。それに対してニャンガトムは、所有する家畜の頭数は少な

く、道具の製作技術も未熟な人びととして、しばしば軽蔑的に語られる。

今日でもほとんどの取引は物々交換でおこなわれており、現金を使うことはまれである。交換率は時代による変動があるものの、ほぼ安定している。ここでは、ダサネッチとトゥルカナとのあいだでいかなるモノがどれほどの交換率で交換されているのかを示しておこう (表 3)。大まかにいえば、トゥルカナからは上記の道具と装身具類に加えて小家畜が提供され、それに対してダサネッチはしばしばモロコシやタバコ、ヒョウタンなどの農産物を提供する。オモ川の氾濫原を利用して農耕が可能なダサネッチに比べて、トゥルカナは食糧生産を天水のみに頼っている。そのため彼らは、氾濫原で生産された穀物を求めて

表3. トゥルカナとのおもな交易物と交換率

ダサネッチ→トゥルカナ	トゥルカナ→ダサネッチ
家畜	
オス子牛 1	小家畜 6-7
メス子牛 1 or オス成牛 1	小家畜 12-13 or 成ロバ 1 or メス子ロバ 1
オス子ロバ 1	小家畜 10 or オス子牛 1
メス子ロバ 1	小家畜 15 or メス子牛 1
モロコシ, ヒョウタンカップ 3 杯	オス小家畜の子 1
タバコ, 30 センチ程度の皮袋一杯	オス小家畜の子 1
攪乳用ヒョウタン大 or ヒョウタンカップ	オス小家畜の子 1
モロコシ, ヒョウタンカップ 4 杯	メス小家畜の子 1
攪乳用ヒョウタン特大 or ヒョウタンカップ	メス小家畜の子 1
家財道具	
モロコシ, ヒョウタンカップ 3 杯 or 750 ミリリットル缶 20 杯	ウシの皮
タバコ 20-30 個	ウシの皮
モロコシ, ヒョウタンカップ小 2 杯 or 750 ミリリットル缶 5-10 杯	小家畜の皮
タバコ 10 個	小家畜の皮
モロコシ, ミルク入れの中一杯に詰める or キロ缶 4-10 杯	ミルク入れ
タバコ, ミルク入れの中一杯に詰める or 5-20 個	ミルク入れ
攪乳用ヒョウタン大	ミルク入れ
モロコシ, ミルク入れの中一杯に詰める or キロ缶 4-5 杯	ミルク入れ (フタが牛皮)
タバコ 4-20 個	ミルク入れ (フタが牛皮)
モロコシをバター入れの中一杯に詰める or キロ缶 4 杯	バター入れ
タバコ 5-10 個	バター入れ
モロコシ, キロ缶 3 杯	木製の筒 (道具入れ)
モロコシ, キロ缶 4 杯	グラインドストーン
モロコシ, キロ缶 5 杯	ナイフ
攪乳用ヒョウタン中	ナイフ
小家畜 1	槍
モロコシ, キロ缶 10 杯	鍋
攪乳用ヒョウタン中	木を切る道具
装飾品	
モロコシ, キロ缶 2-5 杯 or リョクトウ, キロ缶 1 杯	ビーズ 1 巻き
タバコ 4-10 個 or バター製造ヒョウタン大 or 5-10 ブル	ビーズ 1 巻き
小家畜 1	ビーズ 10 巻き
モロコシ, キロ缶 1 杯	プラスチックビーズ 1 巻き
タバコ 10	鉄製腕脚輪 1
モロコシ, ヒョウタンカップ 1 杯	4 巻
タバコ 100 個	片腕一杯
小家畜 1	両腕一杯
モロコシ, キロ缶 5 杯	アルミ製腕輪片腕一杯
タバコ 200 個	両腕一杯
モロコシ, 750 ミリリットル缶 2 杯	手足につける鈴
モロコシ, キロ缶 5-10 杯	少女の前掛けにかける鉄玉 1 巻き
モロコシ, 750 ミリリットル缶 1 杯	ダチョウの羽小
モロコシ, 750 ミリリットル缶 4-5 杯	大
植物	
タバコ 3	Nyabakakitang の皮 (胃薬)
タバコ 3	Delmach の根 (胃薬)
タバコ 3	Gaidate の実 (砕いてコーヒーに入れる)
モロコシ, 750 ミリリットル缶 4-5 杯	Alicho の枝 (1.5 m ほどの枝を加工して杖にする)
モロコシ, キロ缶 4-5 杯	Akalach の枝 (ミルク入れやロバの道具をつくる)

ダサネッチの地を訪れることが多い。それに加えてトゥルカナは、生活に欠かせないタバコやヒョウタンをみずから生産することができないため、その供給を近隣の民族に依存している [伊谷 1995]。

これまで記してきたモノ以外で、外部世界からしか入手できない重要な財として銃と弾

薬がある。これらは、ほとんどの場合ウシとの物々交換で入手されている。銃の入手先と交換率は歴史的に変化してきた。表4は163人の成人男性が、これまで交易で得た銃の入手先と交換率を年代ごとにまとめたものである。この表から分かるように、1960年代までは、おもにエチオピア高地の町マジを拠点

表 4. 銃の入手先と交換率の変化

年代	交換					交換率 <sup>3)</sup>
	ホール	高地人 <sup>1)</sup>	ダサネッチ	ニャンガトム	その他 <sup>2)</sup>	
1930年代		1				5
1940年代			1		1(S)	4.5
1950年代	1	7(7)				4.4
1960年代	6	12(11)	1	1	2(S, H)	4.9
1970年代	19	10(9)	4	1	2(K, B)	6.6
1980年代	24			1	5(H2, B2, K)	7.3
1990年代	70	6	7	1		4.8
2000年代	22		17	9	2(H, B)	3.7
合計	142	36	30	13	12	5.2

<sup>1)</sup> ( ) 内はマジの商人から購入した事例

<sup>2)</sup> Sはソマリ, Hはハマル, Kはカラ, Bはボラナをそれぞれ指す

<sup>3)</sup> 銃と交換されたウシの頭数を示す。小家畜で取引された場合は小家畜1頭＝ウシ0.1頭に換算。それ以外の財で取引された場合は計算から除いた

に活動していた商人から購入していたが、政府による介入によってこの取引経路は制限されたため、1970年代以降はおもな入手先がホールに変化した。2000年代に入ると、それまで戦いが頻発していたニャンガトムとの関係が良好なものとなったため、彼らと交換することも増えている。1970年代まで、ダサネッチは入手した銃を、銃の流通が厳しく取り締まられていたケニアに暮らすトルカナとのあいだで、家畜と交換して利益を得ていたが、1980年代以降にケニア側でも自動小銃が流通し始めたため、今日ではそのような取引は少なくなっている。

### 3 友人関係

#### 1) 関係の概要

交易や共住はあくまで一回的な関係でしかない。モノの取引を終えれば、双方は各自の村へ帰っていくし、氾濫の水が引けば、ダサネッチは氾濫原へ戻ってくる。双方ともに遊動的な生活を送っているので、今後再会する保障はない。そのため人びとは、交易や共住の場で出会った気が合う人物や世話になった人物との関係をより継続的なものにするのを望み、友人関係 (*beel*) を形成することがある。友人関係を結ぶ際には、一方の家に集

まってコーヒーをとともに飲み、「われわれは友人となる」、「われわれに安寧を」などと祝福のことばを交わす。また友人関係を形成したことの証として、小家畜を殺してその腹腔脂肪 (*muor*) を肩にかけ合ったあとで肉をもに食べることもある。さらにこれらの祝福に前後して、どちらか一方が、あるいは双方が同時にモノの贈与をおこなうときがある。

筆者はダサネッチの10代から80代の成人男性169人に、近隣民族の成員との友人関係に関する聞き取り調査をおこなった。その結果、全体の71%が合計384人の友人を有していた(表5)。つまり、友人を有する成人男性一人当たり平均3.2人の友人がいたことになる。

年齢別でも、すべての年齢の男性が友人関係を有していた。年齢が上がるにつれて友人の数は増えている。これは、年を重ねるごとに出会いの数が増えてより多くの関係が形成されていくからである。ただし年長になるにしたがって、他民族の成員と共住する家畜キャンプにみずから出向くことはまれになり、さらに年長の友人が次第に死亡していくため、友人数の増加は頭打ちとなる。

女性が自分(たち)だけで近隣民族の居住地域へ出向き、友人関係を形成することはま

表 5. 近隣民族との友人数（年代別）

年齢	友人数（人）											合計	友人保有率 （%）	平均友人数 <sup>1)</sup> （人）
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10～			
10代	13	7	1	2	1	1						25	48.0	2.0
20代	8	11	7	3	2		1					32	75.0	2.0
30代	13	8	7	3	2	2					1	36	63.9	2.7
40代	5	3	3	4	3	6	1		1		1	27	81.5	4.3
50代	5	3	3	5	1	2	1	1	1	1	1	24	79.2	4.2
60代	3		1	3	2	1	2		1			13	76.9	4.4
70代～	2	1	2	4		3						12	83.3	3.3
合計（人）	49	33	24	24	11	15	5	1	3	1	3	169	71.0	3.2

<sup>1)</sup> 全友人数を友人を有する成員の数で割った数値

表 6. 近隣民族との友人数（地域集団別）

地域集団名 <sup>1)</sup> 民族名	インカペロ (79)	インコリア (33)	ランダル (29)	エレレ (10)	クォオロ (8)	リエレ (5)	オロ (4)	ソガーリッチ (1)	合計（人） (169)
トゥルカナ	42	6	28	3	13	2			94
ニャンガトム	35	4	46	14	5	2			106
ハマル	16	15	2	3		1		4	41
ガブラ	3	12							15
カラ	23		5	6	1	1			36
ホール	38	25	1	1		2	1	2	70
トゥルカナ（漁撈民）		19							19
その他			2	1					3
合計（人）	157	81	84	28	19	8	1	6	384

<sup>1)</sup> ( ) 内の数値は調査対象者人数を表す

れである。しかし、家を訪問してきた夫の友人の寝食の世話をするのは妻であり、妻と夫の友人のあいだにも親しい関係が築かれることがある<sup>19)</sup>。また親しくなった友人の家を訪問する際には、しばしば妻と子供を連れて行く。つまり、友人関係は成人男性間の交流を契機に形成され、世帯間の関係に発展していくものである。

さらに筆者は、それぞれの友人関係について、どの民族の成員と、いかなるきっかけで関係が形成されたのか、また相互にどのようなモノを贈与し合ったのかを調査した。以下でくわしくみていこう。

## 2) 地域集団と相手民族

表 6 は、各成員が有する友人が帰属する

民族の数を地域集団ごとにまとめたものである。ここから、人びとが自分の帰属する地域集団に隣接する民族の成員と多くの友人関係を有していることが分かる（図 1）。たとえば、ダサネッチランドの北西部に暮らすランダルはニャンガトムとトゥルカナの友人がほとんどであるのに対して、南西部を中心に広く分布するインカペロは諸民族とくまなく友人関係を有している。ただしガブラとの友人数はほかと比べて少ない。ガブラとの友人関係を多く有しているのは、直接に居住地域を接しているインコリアの成員だけである。

## 3) 関係形成の契機と贈与財

関係形成の契機やその前後に贈与する／されるモノは、民族ごとにちがいがあ（表 7、

19) たとえば、友人が二回目に相手の集落を訪問するとき、夫ではなく妻への贈与物を携えて来ることがある。

表 7. 友人関係が形成された契機の割合

民族名	共住	交易のための来訪	交易のための訪問	友人や親族の紹介	平和儀礼	学校	その他	未調査	合計 (%)	総友人数 (人)
トゥルカナ	40	32	9	3	5	2		9	100	94
ニャンガトム	54	17	15	7	2		2	4	100	106
ハマル	37	29	17	7	2			7	100	41
ガブラ	60	7	13		20				100	15
カラ	22	47	11	8		3		8	100	36
ホール		47	34	6			3	10	100	70
トゥルカナ (漁撈民)		32	21				11	37	100	19
その他 <sup>1)</sup>	33	33					33		100	3
全体 (%)	33	31	17	5	3	1	2	8	100	384

<sup>1)</sup> トボサ, ムルシ, ムグジが各 1 人ずつ

表 8)。「われわれの人びと」に分類されるホールは、ダサネッチと直接には居住地域を接していない。ホールはこの地域で銃や家畜などの取引人として活躍しているため、ダサネッチが銃を購入するためにホールの地へ行った際、あるいはホールが銃を売却したり家畜を購入するためにダサネッチの地を訪れた際に、多くの友人関係が形成されている。ホールは、ダサネッチに交易などで得た現金をそのまま贈与することが多い。それに対してダサネッチは、ウシや荷物を運ぶために必要なロバに加えて、ケニア側の町で得た腰巻や服を贈与する。ダサネッチはエチオピアとケニアの国境にまたがって住むため、エチオピア側では稀少な工業製品などをケニア側から手に入れることができる。ホールはそれらをエチオピア側の町などで売却して、利益を得るのである<sup>20)</sup>。

ダサネッチと直接に居住地域を接する残り 5 つの民族は、交易に加えて放牧地などでの共住が友人関係を形成する主要なきっかけとなっている。対象数の少ないガブラを除けば、贈与する／されるモノの特徴は二つのグループに分けて考えることができる。トゥルカナやハマルには、ダサネッチがモロコシなどの農産物を贈与し、相手が小家畜や家畜生産物

を贈与していることが多い。とくに、トゥルカナの人びとは噛みタバコを好むがみずから生産することができないので、ダサネッチが栽培したタバコを頻繁に与える。またダサネッチが生産しミルクを攪拌する容器などに加工されるヒョウタンも、しばしば贈与される。それに対して、ニャンガトムやカラとは、たがいに小家畜やモロコシを贈与し合うことが多い。

これには、各民族が暮らす地域の生態環境のちがいが反映している。トゥルカナやハマルが暮らす地域は、食糧生産を不十分かつ不安定な天水農耕のみに頼っている。それに対して、ダサネッチは豊かな氾濫原のおかげで安定した穀物生産が可能となっている。そのため、トゥルカナらはとくに干ばつに見舞われた際に、飢えをしのぐためのモロコシを求めてダサネッチの地を訪れることがある。逆にダサネッチは、穀物の貯蔵が少なくなってきたころ、これらの民族から入手した小家畜を屠殺してその肉を食べることで、つぎの収穫までの時期をしのぐ。一方ニャンガトムやカラはダサネッチ同様、氾濫原農耕を営んでいるため、そのときどきに双方が不足しているモノを贈与しあうことが多くなっている。

もっとも、贈与する／されるモノには、生

20) ダサネッチとホールの関係については、Ayalew [1997: 162-165] も参照。

表 8. 友人間で贈与した/されたおもな財

## トゥルカナ

ダサネッチ→トゥルカナ	数	トゥルカナ→ダサネッチ	数
モロコシ	65	小家畜	54
タバコ	31	ダチョウの羽	5
ヒョウタン (加工前)	20	赤土	5
攪乳用ヒョウタン	15	ウシ	4
リョクトウ	14	ロバ	3
ヒョウタンカップ	7	腰巻	2
ウシ	6	ヒョウ皮	2
小家畜	6	その他	8
ヒョウタン製おたま	5	合計	83
服	3		
ロバ	2		
アラケ (酒)	2		
その他	3		
合計	179		

## ハマル

ダサネッチ→ハマル	数	ハマル→ダサネッチ	数
モロコシ	25	小家畜	24
ウシ	3	ウシの皮	6
小家畜	3	小家畜の皮	2
ロバ	2	土器	2
その他	8	鎌	2
合計	41	その他	7
		合計	43

## カラ

ダサネッチ→カラ	数	カラ→ダサネッチ	数
小家畜	9	土器	16
モロコシ	5	モロコシ	7
バター	4	小家畜	4
コーヒーの殻	2	コーヒー豆	3
弾薬	2	キリンの尻尾	3
攪乳用ヒョウタン	2	タバコ	3
その他	10	斧	3
合計	34	ナイフ	3
		蜂蜜	2
		その他	9
		合計	53

## トゥルカナ (トゥルカナ湖北東岸の漁撈民)

ダサネッチ→トゥルカナ	数	トゥルカナ→ダサネッチ	数
小家畜	4	マット	3
攪乳用ヒョウタン	3	鍋	2
モロコシ	2	その他	5
その他	4	合計	10
合計	13		

表 8. 続き

## ニャンガトム

ダサネッチ→ニャンガトム	数	ニャンガトム→ダサネッチ	数
ウシ	18	小家畜	30
小家畜	12	弾薬	19
タバコ	12	ウシ	4
モロコシ	9	家畜の鈴	4
アラケ (酒)	9	槍	2
ロバ	9	ダチヨウの羽	2
腕輪	5	ウシの皮	2
弾薬	4	ヒョウ皮	2
コーヒーの殻	4	モロコシ	2
腰巻	4	その他	13
ヒョウタンカップ	2	合計	80
服	2		
現金	2		
その他	9		
合計	101		

## ガブラ

ダサネッチ→ガブラ	数	ガブラ→ダサネッチ	数
弾薬	2	小家畜	5
小家畜	2	その他	3
ロバ	2	合計	8
その他	2		
合計	8		

## ホール

ダサネッチ→ホール	数	ホール→ダサネッチ	数
腰巻	12	現金	16
ウシ	10	ダチヨウの羽	16
ビーズ	8	弾薬	6
ロバ	7	ビーズ	5
服	6	弾丸ベルト	4
小家畜	4	腰巻	3
弾薬	4	ウシ	2
現金	3	その他	7
箱	2	合計	59
キリンの尻尾	2		
その他	5		
合計	63		

態環境以外のさまざまな要因も関係している。たとえば、ニャンガトムはスーダンに暮らすトボサと友好的な関係にあり、彼らから入手した弾薬をダサネッチに贈与することがあるし、道具の優れた製作技術を有するハマルやカラからは土器などがもたらされること

も多い。

なお、インコリアの人びとは表6で「トゥルカナ (漁撈民)」と多くの友人関係を有している。トゥルカナの多くはトゥルカナ湖北西部に暮らしておもに牧畜を営んでおり、ダサネッチは彼らを「敵」に分類する。一方、

インコリアはトゥルカナ湖北東部でおもに漁撈に依存して生活する少数のトゥルカナを「われわれの人びと」に分類して、親しい関係を多く築いている。両者が戦うことはない。

#### 4) モノのやりとりの特徴

友人関係におけるモノのやりとりの重要な特徴は、それが一回で完結するものではない点、つまり最初の贈与とお返しの贈与のあいだにしばしばタイムラグが存在している点である。384組の友人関係中、その形成や維持の過程でモノの贈与がなされたのは278組であった。そのなかで、最初の贈与に対するお返しの贈与がなされていた組の割合は75%であった。これらのお返しは、しばしば時間を経た相互往来により達成されたものである。つまり歓待や贈与を受けた側が、いちど自分の集落に帰ったあとでお返しをするために相手の集落を再訪することや、与えた側が相手の集落を訪問して贈与を受けることで、継続的な関係が形成されているのである。そのことを考えれば、最初の贈与に対するお返しがなされていない残り25%の組も、今後「あげっぱなし」になっている側へお返しがなされる可能性があると考えられる。

またお返しを受けても、あるいは同時期にモノを贈与し合っても、そのやり取りは交易における交換率と比較してみると、ほとんどの場合「等価交換」にはなっていない。たとえばダサネッチは、トゥルカナやニャンガトムとの交易では去勢牛1頭と小家畜12頭程度を交換する。それに対して、ダサネッチが1頭の去勢牛を贈与した10事例をみると、交易の交換率と同じ割合でお返しの贈与がなされていることはほとんどない。お返しは小家畜3～5頭のことが多く、交易の交換率と比較するとダサネッチは「損」をしていることになる。交易での取引は、固定された交換レートに基づいて同時にモノをやり取りすることで対称的な関係が形成されているの

に対して、友人間では時間性を介在させて非等価的にモノをやり取りすることで非対称的な関係が形成されている。

#### 5) 関係の発展

相互往来を重ねるなかで、おもに二つの経路を経て友人関係がより強固な関係に発展することがある。一つは、双方の息子が父親たちからその関係を引き継いで、世代を超えた友人関係を形成することである。人びとは、このような友人をダルト (*dalto*) と呼ぶ。ダルトとはおもに父系、母系を含めた三世代程度の親族を指す語であるから、これは友人関係が擬似的な親族関係へ移行したこととして捉えられる。

もう一つは、「名付けの友人関係 (*lil match meto*)」を結ぶことである<sup>21)</sup>。ダサネッチは出産の2～3日後に新生児の名付け儀礼をおこなうが、名前は両親が選んだ名付け親が与える。両親は親族や親しい友人に名付け親となることを依頼するが、その際には異なる民族に帰属する友人が選ばれることもある。実際、近隣民族との友人関係384組のうちの5%が、名付けの友人関係であった。

世代を超えた友人や名付け親となった友人関係は、さらに親密さを増す。たとえば、この地域には結婚にともなって、夫方の親族が妻方の親族やその親しい友人に婚資として数十頭の家畜を移譲する慣習が共通して存在しているが、これらの友人関係では、どちらかの娘が結婚した際にその婚資の一部が他方へと与えられる。

#### 4 親族関係

親密な友人関係に加えて、ダサネッチと近隣民族とのあいだには結婚や養子縁組をとおした親族関係も存在している。筆者は、170人の成人男性に『『あなたの人びと (*gaalku*)』のなかで近隣民族の成員を養子にしたり、女性と結婚したりした人物はいますか』

21) ダサネッチ同士の「名付けの友人関係」については、Almagor [1978: 119-121] を参照。

表 9. 近隣集団との親族関係

## 通婚関係

世代区分	人数	インフォーマントとの関係
同世代	8	W5, BW3
一世代上	27	M4, FW8, FBW14, MBW1
二世代上	47	FM18, MM9, FFW14, MFW・FFBW 各 3
三世代上	3	FFM2, MFM1
合計	85	

## 養子関係

世代区分	人数	インフォーマントとの関係
同世代	10	Ego2, FS4, FD・FBS・FBD・MBD 各 1
一世代上	17	F1, FFS6, FFD9, MFD1
二世代上	6	FF5, MF1
三世代上	2	FFF2
一世代下	5	S2, D・BS・FMSD 各 1
合計	40	

表 10. 結婚相手民族とその契機

民族名	干ばつ	共住	戦争略取 <sup>2)</sup>	共同体からの逃亡	その他・不明	合計
トゥルカナ	29	22	12	7	12	82
ニャンガトム	3	7			3	13
ハマル	1	2	2	1		6
ガブラ			4		3	7
ホール	2				1	3
その他 <sup>1)</sup>	2	3	2	1	7	15
合計	37	34	20	9	26	126

<sup>1)</sup> サンプル 4 人, ムルレ 3 人, ムルシ 2 人

<sup>2)</sup> ほかのダサネッチに戦争で略取されて養子とされた少女と成長したのちに結婚したもの

と尋ねた。ダサネッチは系譜関係を父方、母方ともに 3 世代ぐらいいまでしか記憶しておらず、ここでいう「あなたの人びと」とは、父母、父母の兄弟とその子供、祖父母などまでを包含している。妻方の親族は含まれていない。

調査の結果、対象者の 41% が近親に近隣民族の女性と結婚した人がおり、18% が近親に近隣民族から養子をとった人がいると答えた (表 9)。たとえば、筆者の 5 名のインフォーマントは近隣民族の女性と結婚しており、2 名のインフォーマントはトゥルカナとして生まれたが、ダサネッチの地に移住してダサネッチの一員となった男性であった。

ダサネッチの成員が、近隣民族の成員によって養子にされた割合やそのもとに嫁いだ

割合についての定量的データはないが、聞き取り調査によればそのような人も数多く存在している。

## 1) 通婚

近隣民族の女性と結婚したきっかけでもっとも多いのは、干ばつによる移住である (表 10)。これは干ばつに見舞われたトゥルカナなどの女性が、豊かな穀物があるダサネッチの居住地へ移動してきたり、なにも持たずに助けを求めてやってくることもあり、そのときの出会いがきっかけとなって結婚にいたった事例である<sup>22)</sup>。つぎに多いのが、隣人として共住しているなかで、たがいに親密となり結婚にいたったものである。

「敵」の民族と結婚することについて、ダ

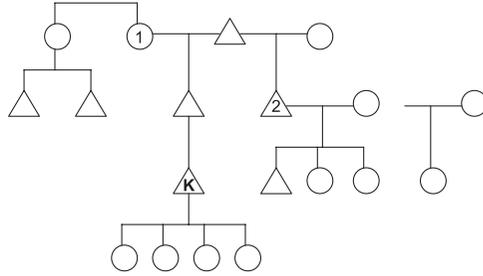


図2. Kの親族関係

サネッチにつよい心理的抵抗はないようである。多くの男性は、「ダサネッチでも敵でも、その女性が美しければ結婚する」と述べた。ただし、ダサネッチでもっともつよい呪術的力を持つとされるトゥールニエリムクランとファルガールクランの成員のなかには、「われわれは呪術クランであるから、割礼をしていない女性が家に座ることはよくない」と述べて、女子割礼をおこなわないトゥルカナやニャンガトムの女性との結婚を望まない人もいた。

ダサネッチと近隣民族の未婚女性の髪形は異なっており、結婚式当日にも差異はそのままである。これらの女性がダサネッチの女性と同じ外見になるのは、妊娠後である。ダサネッチの女性は妊娠すると、髪をすべて剃りあげる。他民族から嫁いできた女性もこのときに髪を剃りあげ、その後、髪が生えてくるとダサネッチの既婚女性と同じ髪型になる。

結婚の際には、婚資のやりとりがおこなわれる。ダサネッチと近隣民族では、婚資の量やそれを移譲する仕組みが異なっていることがあるが、これまでの通婚の歴史のなかでどちらの方式を採用するのかは決まっている。たとえばトゥルカナの女性とダサネッチの男性が結婚する際には、トゥルカナ式の婚資の移譲方式が採用される。これは結婚式の際に、新婦の親族が各自小さな家畜囲いをつくり、それぞれの囲いが一杯になるまでに、新郎側が家畜を囲いに入れていくものである。それ

に対してニャンガトムの婚資のやり取りは、ダサネッチと同じく10年以上に及ぶ長期間の交渉をおこなわれていくものである。

また、この夫婦の娘が結婚したときには、その両親や親族へ婚資の一部が提供される。友人関係における贈与のように、婚資の移譲という時間性を介在させたモノのやり取りによって、両者のあいだには非対称的な関係が形成されているのである。たとえば、ニャンガトムと二つの系譜をとおして親族関係を有する年長男性Kの事例をみてみよう。彼のニャンガトムとの親族関係は図2にまとめている。

#### 事例1

彼の父の母(図中の1)はニャンガトム出身の女性であり、彼女のニャンガトムの親族とは現在でも交流がある。現在彼の娘が結婚したときに婚資のやり取りをするのは、彼の祖母の姉の二人の息子だけである。たとえば、彼の次女が結婚したときには、1頭のウシと2頭の小家畜を二人にそれぞれ与えた。

また彼の父の異母兄弟(図中の2)は、少年時代に割礼を恐れてニャンガトムランドへ逃亡した。ニャンガトムは割礼をおこなわないからである。そこでニャンガトムの養子となり、2人のニャンガトムの女性と結婚した。これらの夫婦の娘3人の婚資として、彼はウシ3頭と小家畜2頭、小

22) カルは、飢饉の時期に妻や子供を連れてトゥルカナの男性や少年が「難民」としてダサネッチの地に来て、居住場所や食糧の見返りに放牧に従事することがあることを指摘し、1970年には少なくとも250名のトゥルカナがダサネッチの地にいたと記している [Carr 1977: 181]。

表 11. 養子にした相手民族とその契機

民族名	干ばつ	戦争略取	共同体からの逃亡	その他・不明	合計
トゥルカナ	10	8	7	1	26
ニャンガトム	2				2
ハマル			1		1
ガブラ		2		2	4
ホール	2				2
その他 <sup>1)</sup>	1	2	1	1	5
合計	15	12	9	2	40

<sup>1)</sup> ムルシ 2 人, ボラナ 2 人, ディデング 1 人

家畜 2 頭, ウシ 2 頭と小家畜 2 頭をそれぞれ受け取った。逆に彼の長女と次女の婚資として, ウシ 5 頭と小家畜 2 頭, ウシ 3 頭と小家畜 2 頭を異母兄弟に, またその息子の一人に, 三女と四女の婚資として小家畜 2 頭, ウシ 1 頭と小家畜 2 頭を与えた。

このようにダサネッチと隣接民族の成員が結婚することで, 婚資を移譲しあう関係が生まれ, 世代を超えて引き継がれていく。ただし同じ親族であっても世代を重ねるなかで, その後も親しい関係を築く相手と関係が継続しない相手に分かれていき, 婚資を与え合う関係はより限定されていく傾向にある。

## 2) 養子

養子関係が形成されるきっかけは, 干ばつによる移住がもっとも多く, つぎに多いのが戦争で略取してきた子供を養子にするものである (表 11)。これは, 敵の集落を攻撃して撃退したあとに, そこに取り残された幼い子供の手を取ってみずからの集落へ連れ帰ってくるものである。

これらに次いで, ほかの成員からの暴力行使や資源の剥奪など, 共同体内部のさまざまな抑圧から逃亡してきた成員も多い。いくつか例を挙げておこう。

### 事例 2 : 2006.3.18, 30 代男性

この人物の祖父はハマル出身である。祖父の母は, ハマルランドに暮らしていると

きに, ほかのハマルから棒でつよく打られた。彼女の夫がなにをしていたのかは不明である。そのため, 彼女は 1 人の幼子だけを連れてダサネッチランドに逃げて来た。この女性をあるインコリアが見初めて結婚した。婚資を支払う必要がなかったので, 人びとはこの女性は「カミが彼に与えた」と述べた。このときに, 彼女の幼子も養子とされた。それがこの人物の祖父である。

### 事例 3 : 2006.4.13, 40 代男性

この人物の兄の 1 人はトゥルカナ出身である。トゥルカナの地が干ばつに見舞われたときに, この兄はトゥルカナの母とともにロバームガット村にやってきた。しかし母はまもなく死んでしまった。そこでこの人物の父が養子にした。兄が成長してランダルの娘と結婚したときには, この人物は 3 頭のウシをその婚資として提供した。また父の兄弟も 10 頭のウシを提供した。

### 事例 4 : 2006.8.28, 30 代男性

この人物の祖父は 4 人のトゥルカナ (女性 3 人, 男性 1 人) を養子にした。この子供たちはまだ少年少女のころ 4 人でやってきた。当時トゥルカナの地を干ばつが襲い飢餓に苛まれていた。しかし父親は自分だけが食事を取り子供たちには与えなかった。そこで子供たちだけでダサネッチの地へ逃げてきた。彼の祖父はトゥルカナ語を

話すことができたので、子供たちと話して養子とした。

事例5：2006.8.22, 50代女性<sup>23)</sup>

この人物の兄1人と姉2人はトゥルカナ出身である。彼女らの母親は夫と死別したあと、その兄弟によって彼女が引き継ぐべき家畜を奪われてしまった。トゥルカナの地にはモロコシもなかったため飢えに苛まれ、知る人もいないダサネッチの地へ幼い子供を連れてやってきた。そこで、この人物の父と結婚し、その子供は養子となった。2人の娘は成長するとほかのダサネッチと結婚し、父の親族が婚資を得た。息子は成長したが、割礼をひどく恐れたためにトゥルカナの地へ逃亡した。トゥルカナは割礼をおこなわないからである。現在はトゥルカナとして暮らしている。

養子とされた近隣民族の成員は、まず受け入れ先世帯の働き手 (*gede*) となる。男性はおもに家畜キャンプで放牧に従事し、成長して働きが認められると、世帯長の「息子」として世代組と年齢組<sup>24)</sup>への加入儀礼をおこなう。彼は世帯長と同じ地域集団とクラン<sup>25)</sup>に帰属することになる。その後、結婚をすると独立した世帯を設けて、複数の通過儀礼をおこなうことで彼は「ダサネッチになっていく」。厳密に言えば、養子にされたその人自身は「本当のダサネッチ (*Daasanetch tuud le*)」ではない。もし彼が、ダサネッチが社会的年長者となるために必要なディミと呼ばれる儀礼をおこなえば、その息子は「本当のダサネッチ」となる。女性はおもに家事の手

伝いをし、事例5に示されているように成長するとほかのダサネッチのもとへ嫁ぎ、その婚資は彼女を養子にした「親」とその親族が得ることになる。

このように近隣民族の成員を受け入れる側は、単なる「慈善精神」で受け入れているわけではない。氾濫原農耕と牧畜をおこなうダサネッチは、慢性的な労働力不足状態にあるため、助けを求めてきた近隣民族の成員は労働の担い手として貴重である。またとくに幼い女性は、成長後に得られる婚資を期待することができる。人びとは、このような経済的要因も考慮に入れながら、「敵」を含めた外部者を受け入れているのである。

#### IV. 横断的紐帯が形成される背景

以上みてきたように、ダサネッチは今日においても「われわれの人びと」だけではなく、長年戦いを重ねてきた「敵」の成員ともさまざまな横断的紐帯を有している。これらの関係は、降水量が空間的、時間的に不安定である「不確実な」環境 [Scoones 1994] にあるこの地域で、人びとの生存に重要な役割を担っている。明確な空間的境界を設けずに放牧地を共同利用すること、干ばつの発生時には近隣民族の成員がダサネッチの地を訪問して交易や贈与によって穀物を得ること、また同じく干ばつの際に十分な食事が与えられない近隣民族の女性や子供が、通婚や養子関係をとおして「ダサネッチになる」こと。このような民族境界を越えた居住地、モノ、人の相互移動をとおして、人びとは地域レベルの食糧安全保障をつくりだしてきたのである。

23) この事例は、横断的紐帯について聞き取りをしているときに話されたことではないため、表9の数値には入っていない。

24) ダサネッチには世代一年齢組織が存在する。世代組織とは系譜上の世代原理(祖父母—父母—子供)に基づいて形成される組織、年齢組織は生物学的年齢に基づいて形成される組織である。ダサネッチのすべての成員は世代組と年齢組に帰属する。世代組は地域集団ごとに存在し、それぞれが独立して加入儀礼をおこなう。世代組内には8つほどの年齢組が存在する。年齢組とは、同時期に加入儀礼をおこなった成員の集まりである。

25) ダサネッチには、各地域集団ごとに、父系をとおして継承される3～14個のクラン (*tuur*) がある。クランは外婚単位である。

また民族境界を越えた友好的なコミュニケーションは、生活していくために必要な資源を奪われた寡婦や両親から食事を与えられない子供など、共同体内部には逃げ場のない抑圧に苛まれた人びとに、そこから避難し、新たな生活を営むための場と機会を提供している<sup>26)</sup>。ダサネッチは干ばつや社会的排除に遭遇した近隣民族の成員、いわば「環境難民」と「社会-政治難民」を、単なる商売の相手としたり「よその」として排除したりするのではなく、個人的な友人関係や親族関係を築く相手として迎え入れてきたのである。

このような関係が形成され続けてきた背景には、いくつかの要因を指摘できる。以下ではそれを示していこう。

## 1 生態環境

一つ目は、氾濫原という生態環境である。くり返し述べているように、ダサネッチランドは年間平均降水量が400ミリ以下であるにもかかわらず、オモ川の氾濫のおかげで相対的に豊かで安定した食糧生産が可能となっている。それに対して近隣に暮らす諸民族、とくにトゥルカナとハマルは食糧生産を不十分かつ不安定な天水のみに頼っている。そのため彼らは干ばつに見舞われると、氾濫原で生産された穀物を求めてダサネッチの地を訪れる。氾濫原という豊かな生態環境が、ダサネッチランドを民族境界を超えた集まりの場としている。

ほかのアフリカの氾濫原地域を取り扱った研究でも、そこが多くの民族が集まる場となっていることが報告されている[松田(凡)1988]。ただし多くの地域では、一部の成員が氾濫原の資源利用を管理して富を独占することで階層的な社会が形成されたのに対して、ダサネッチではそのような階層は発達せ

ず、むしろ個人のネットワークを拡大する場として氾濫原の資源が利用されている点が特徴的である。

また干ばつが起きなくても、氾濫原農耕と天水農耕では収穫期が異なっていることが、相互のやりとりを活性化させる。天水農耕では雨期が終わったばかりの6~7月ごろが収穫期であるのに対して、氾濫原農耕では11~3月ごろに収穫をおこなう。つまり一方の貯蔵が尽きてきたところに、他方の収穫がおこなわれるため、穀物が不足する時期に相互にモロコシなどをやり取りすることができるのである。

## 2 多言語状況

二つ目は、この地域に広がる多言語状況である。ダサネッチと近隣民族との言語は異なっている。ガブラやホールとは同じ東クン系だが、共通する語彙はわずかであるし、ほかの4民族はナイル系とオモ系で言語系統そのものが異なる。また、この地域にはいわゆる地域共通語は存在していない。加えて、学校教育も浸透していないので学校で教えられているアムハラ語で十分な会話ができる人もわずかである<sup>27)</sup>。しかし他民族と隣接して暮らす地域集団の成員には、交易や共住などをくり返すなかで相手民族の言語を習得した人がおり、その人を通訳としてそれ以外の人びとも会話を交わすことが可能となっている。

ダサネッチが「われわれの人びと」と呼ぶホールとカラは、ダサネッチ語を話せることが多い。ホール語を話せるダサネッチに出会ったことはないが、筆者がダサネッチランドで出会い会話を交わしたすべてのホールは、ダサネッチ語を話すことができた。ダサネッチはしばしば「ホールはダサネッチだ」と言明し、その理由の一つとして「すべての

26) 前節の事例1や5に登場した、割礼を嫌ってトゥルカナやニャンガトムに逃亡したダサネッチの成員にも、この指摘は当てはまるだろう。

27) ただしケニア側では学校教育がより普及しており、スワヒリ語を媒介として同じく学校教育を受けたガブラやトゥルカナと会話することがある。

表 12. 多言語話者

番号 <sup>1)</sup>	年代	地域集団	村の位置	母語以外の習得言語 <sup>2)</sup>
1	60代	インカペロ	西岸	トゥルカナ語, スワヒリ語少し
2	70代	エレレ	西岸	トゥルカナ語
3	60代	エレレ	西岸	アムハラ語, トゥルカナ語少し
4	50代	ランダル	西岸	トゥルカナ語
5	70代	クッオロ	西岸	トゥルカナ語
6	60代	インコリア	東岸	ハマル語, ガブラ語少し
7	50代	インコリア	東岸	ガブラ語少し
8	60代	インコリア	東岸	
9	30代	ンガーリッチ	東岸	
10	60代	ンガーリッチ	東岸	ハマル語少し
11	50代	ンガーリッチ	東岸	
12	50代	オロ	東岸	

<sup>1)</sup> 8は女性, それ以外はすべて男性である

<sup>2)</sup> トゥルカナ語とニャンガトム語は多くの語彙が共通しているため, トゥルカナ語ができる成員はニャンガトムとほぼ問題なく会話できる。逆も真である。

ホールはわれわれの言語を知っている」点を挙げる。

同じく筆者は、カラ語を話せるダサネッチに出会ったことはないが、聞き取りによればダサネッチ語を話することができるカラは数多く存在している。また多くのカラはニャンガトム語が話せるため、ニャンガトム語を知るダサネッチとはそれを用いて会話することもある。ホールとカラは人口規模が小さいため、周囲を囲むより人口規模の大きい民族をつなぐネットワークの要の役割を担っている。両者が一方的にダサネッチの言語を知っているのは、そのことと関係していると推測される。

対照的に、4つの「敵」民族と会話する際には、ダサネッチが相手の言語を知っている場合もあれば、相手がダサネッチの言語を知っている場合もある。表12は、2006年に政府が主催した民族間の平和会合に出向いた12人のダサネッチが、ダサネッチ語以外に話せる言語を示したものである。言語能力の可否は、本人への聞き取りとほかの民族集団の成員と実際に会話しているときのようすをみて、筆者が判断したものである。

表12から明らかのように、その成員が帰属する地域集団と話することができる言語には対応関係がある。おもにオモ川の西岸に暮らすインカペロやランダル、エレレ、クッオロはトゥルカナ語やニャンガトム語ができることが多く、オモ川の東岸に暮らすンガーリッチやインコリアはハマル語やガブラ語を知る。この会合には、ニャンガトム、ハマル、カラからもそれぞれ12人の成員が参加していたが、各民族の数名が筆者にダサネッチ語で話しかけてきた。

また、家畜キャンプで生活をともにする若者や少年は、たがいの言語を知らず通訳となる成員がいなくても、身振りでコミュニケーションをおこないながら、双方の言語を次第に学んでいくこともある。

言語についてもう一つ付け加えておこう。異なる言語を話す二者がコミュニケーションをする際の潤滑油として作用しているのが、I章で触れた栗本がいうところの民族境界を越えた文化要素の「共鳴」である〔Kurimoto 1998〕<sup>28)</sup>。具体的には、ダサネッチがトゥルカナやニャンガトムがその一部を構成するカ

28) ただし正確に言えば、本論の事例は栗本による「共鳴」概念とはちがいを含む。栗本は、文化

リモジョンクラスター、あるいはアテケル (Ateker) グループの文化的影響下にあることである。ダサネッチもアテケルグループも、各人が気に入ったウシの毛色の名前をニックネームとしてたがいに呼び合う「去勢牛の名前」の慣習を共有している。ダサネッチ語で「去勢牛の名前」に用いられる毛色の語彙は、トゥルカナ語、あるいはニャンガトム語起源のものである。この毛色の語彙は、ダサネッチの重要な社会組織である世代組や年齢組の名前にも用いられている。この毛色名によって、双方の言語は異なっても相互にいい慣れまた聞き慣れたことばで、相手の名前や相手が帰属する世代組や年齢組の名前を記憶し、呼び合うことができるのである。

### 3 個人中心の社会関係

三つ目は、ダサネッチの個人中心的な社会関係である。筆者は別稿で、ダサネッチを「個人創発的な社会構成」、つまり「各個人がその時々でそれぞれの事情に応じて多様な選択と決定をおこなうことを可能とする弾力性を有している」[佐川 2009b: 54] 集団として特徴づけたが、それは近隣民族との社会関係を形成していく際にも当てはまる。とくにここで問題となるのは、「敵」との関係であろう。最近まで戦っていた「敵」、これからは戦うことになる「敵」とのあいだに個人的な友好関係を形成することに対して、周囲の人びとから批判の対象となる可能性もありそうに思える。

しかし筆者は、「敵」の成員と友好的な相互行為を重ねる成員に対して、ほかのダサネッチが批判する声を耳にしたことがない。そのことを端的に表している一つの事例が、銃や弾薬を「敵」の成員に売ったり贈与したりするという行為である。前章で触れたように、近年では少なくなっているが、かつてダ

サネッチはしばしば家畜と交換にトゥルカナへ銃を売っていた。また現在でも、ダサネッチはニャンガトムから銃や弾薬を購入したり、贈与で得たりしている。トゥルカナやニャンガトムは、いつ戦いの相手になってもおかしくない人びとであり、あるダサネッチが売った銃によって、将来の戦いでほかのダサネッチが殺される可能性は容易に想定できるし、逆もまた真である。しかし人びとが、このような個人の行為を非難していることを一度も聞いたことがない。

この点は、近隣地域の事例と比較することでより明確になる。たとえば、ダサネッチと多くの友人関係を有するホールでは、他民族との友人関係はおもに首長職に就く人物が独占している [Tadesse 2005]。それに対して、ダサネッチでは成人男性の7割以上が近隣民族に友人を持つことに示されているように、関係の有無はその人物の民族内における社会的地位により規定されるものではない。またダサネッチから150キロ程度北に位置するボディでは、特定の民族集団を「永遠の敵」として分類し、いっさい友好的な関係を結ぶことはない [Fukui 1994]。それに対してダサネッチは、4つのすべての「敵」集団の成員と友人関係を有している。もちろん民族間に戦争が発動すれば両者の相互往来は途絶え、その期間に友人関係を形成することはできない。しかし戦争が終わり相互往来が再開すれば、相手が「敵」に分類される民族に帰属しているということ自体が、個人間で友人関係や親族関係を築く妨げとなることはない。

その一方でよりつよく制度化された友好関係は存在しない。ダサネッチの北約100キロに暮らすスリにおいては、降雨を願う儀礼を隣接するディジととともにおこない、そのような機会を利用して民族間の協同関係が確認される [Abbink 2005]。しかし、筆者の知る

↗ 要素などが集団間で双方向的に借用されていることを指して、この語を用いている。それに対して本論の事例は、一方向的な借用がなされた事例である。もっとも、トゥルカナなどがダサネッチからならんかの文化要素を借用してきた可能性はあるため、今後さらなる調査をおこなう必要がある。

かぎりダサネッチと近隣民族のあいだには、ごくまれにおこなわれる平和儀礼を除けば、そのような機会は存在しない。友人関係や親族関係は、民族レベルでなされる儀礼の共催などを契機に形成されるのではなく、あくまで個人レベルの相互往来と関係形成への意思をおしてつくりだされているのである。その意味で、彼らの社会関係は「徹底的に個人を中心にして展開」[太田 1986: 210]<sup>29)</sup>している、と特徴づけることができよう。

#### 4 生活様式の共有

このような個人間の関係形成を可能にしているのが、ダサネッチと近隣民族が生活様式や慣習を部分的にはあるが共有していることである。

ダサネッチが利用する町オモラテには、エチオピアの中部や北部の高地地域から移住してきたアムハラ人などが居住している。ダサネッチは、これらの人びとを一括してウシュンバ (Ushumba) と呼ぶ。高地地域では、少なくとも数百年にわたってキリスト教に帰依した王国が存在してきた。ダサネッチを 19 世紀末に軍事征服したエチオピア帝国の中心にいたのがアムハラ人である。ダサネッチにとって高地人とは、かつて彼らの土地を蹂躪し、人びとを殺戮し、その後現在にいたるまで支配を押し付けた人びと、すなわち「国家」を代表する人びとのことである。

高地人と親しい個人的関係を有するダサネッチは、政府の役職に就いた成員や町に暮らす商人を除けばわずかである。なぜ高地人とは親密な個人的関係が形成されないかを彼らが説明することばのなかに、近隣民族とはそれらの関係が形成される条件が反照的に示されている。

一つは、「高地人の友人は自分が町に行く

ばかりで、彼らが村に来ることはない」という点である。ダサネッチと近隣民族の友人はもてなされた側がもてなした側に「今度は自分の村に妻と来てくれ」といって、相互往来を重ねながら関係を深めていく。それに対して高地人は町に滞在しているばかりなので、ダサネッチの一方的な訪問となってしまう。また仮に高地人が村にやってくる、ダサネッチの主食であるモロコシ粥などはあまり食べようとしないし、宗教的な理由からダサネッチが殺した家畜の肉も食べない。相互往来や共食が関係の形成と発展に重要な役割を果たしていることを考えれば、高地人とのあいだには対等で親密な関係は築かれえないのである。

二つは、「高地人は胃が腐っている」、つまりけちな点にある。すでに示したように、ダサネッチと近隣民族とのあいだにはモノの移譲にしばしば時間性が介在するが、高地人はそれを嫌いその場でモノをやり取りすることを求める。そのため高地人とは友人になっても、こちらがミルクなどの贈与物を持っていかなければコーヒーも出してくれない。

それに対して、ダサネッチは自分たちも近隣民族もともに「ウシの皮を与える」人びとだと述べる。ダサネッチの家のなかにはウシの皮が敷かれているが、夕方になるとこのウシの皮を家のまえに敷く。男性はその上に座って放牧地から帰ってきたみずからの家畜を眺め、陽が落ちるとコーヒーや食事ができあがるのを待ち、それを飲んだり食べたりしながら隣家の人と語り合い、夜が更けるとこの皮の上で眠る。つまり「ウシの皮を与える」とは、他者のためにこの皮を敷き、自家に迎え入れて無償で寝食の世話をすることを意味しているのである。ダサネッチはみずからを、そしてまた近隣民族も<sup>30)</sup>、客に対して気前よ

29) これは太田がトゥルカナの社会関係の特徴について述べたことばであるが、その特徴はトゥルカナの隣人であるダサネッチの社会関係にも当てはまる。ゴールドシュミットは、多くの東アフリカ牧畜民に共通してみられる「個人主義的性向」を「独立志向シンドローム」と呼び、その性向と彼らが営む牧畜という生業様式の特徴に一定の連関性を見出そうとしている [Goldshmidt 1971]。

表 13. 初めて近隣集団の成員を見たときの年齢と機会<sup>1)</sup>

年齢 <sup>2)</sup>	地域集団	トゥルカナ <sup>3)</sup>	ニャンガトム	ハマル	ホール
19 歳	インカベロ	7 歳, 交易	10 歳, 共住	未遭遇	町で見かける
18 歳	インカベロ	15 歳, 共住	5 歳, 交易	15 歳, 戦場	兄の妻がホール
15 歳	エレレ	6 歳, 交易	15 歳, 平和儀礼	14 歳, 交易	町でも村でも見る
14 歳	インカベロ	6 歳, 平和儀礼	6 歳, 共住	10 歳, 交易	町で見かける
14 歳	インカベロ	未遭遇	14 歳, 交易	8 歳, 交易	町でも村でも見る
14 歳	ランダル	8 歳, 共住	10 歳, 共住	13 歳, 死体 <sup>4)</sup>	町でも村でも見る
12 歳	ランダル	12 歳, 友人訪問	8 歳, 友人訪問	12 歳, 友人訪問	町でも村でも見る
12 歳	インカベロ	12 歳, 平和儀礼	町でよく見かける	11 歳, 交易	町で見る
11 歳	ランダル	未遭遇	11 歳, 平和儀礼	未遭遇	未遭遇
9 歳	インカベロ	9 歳, 平和儀礼	9 歳, 平和儀礼	未遭遇	町でも村でも見る

<sup>1)</sup> ガブラとカラはいずれの成員も未遭遇である

<sup>2)</sup> 年齢はいずれも 2006 年時点の推定である

<sup>3)</sup> 初めて見たときの年齢, 成員の訪問目的の順番に示してある

<sup>4)</sup> ダサネッチの集落を襲撃に来て殺されたハマルの死体

くふるまう人びととして認識しており, そのように行動する人物を高く評価する。実際, 飢えに苛まれて彼らの地を訪れてきた見知らぬ「敵」を家に招いて歓待し, さらにロバ 3 頭に積めるだけの大量のモロコシやウシ 1 頭を即時的な見返りなしに贈与した事例は多くある。相手の困窮時に差し伸べられた歓待や贈与こそが, 両者のあいだにつよい感情的なつながりを生み出すのである<sup>31)</sup>。

三つは, 「高地人へ女性を嫁がせても父親がお金をもらっただけでほかの親族はなにももらえない」点である。ダサネッチではたがいの娘が結婚した際に婚資を配分し合う成員との関係が, もっとも重要な社会関係の一つであり, これは近隣民族でも同じである。それに対して高地人, とくにアムハラ人の慣習では, 娘の兄弟や母方のオジなどには婚資が支払われないという。そのため, 高地人との結婚には反対する成員が多く存在し, 仮に結婚を強行すれば婚資を配分し合う集団の統合性が失われてしまう。もちろんダサネッチと近隣民族とのあいだにも, 婚資の支払い方法や

量においてちがいがあがるが, 前章で述べたように現在では共通のルールが存在している。逆にいえば高地人とのあいだには 100 年近い接触の歴史があるにもかかわらず, これまでそのような共通のルールが形成されてこなかったわけである。

## 5 相互往来による情報伝達

五つ目は, 相互往来による情報の伝達である。表 7 にみられるように, 近隣民族との友人や親族を有した成員からの直接的な紹介によって新たに友人関係が築かれることがある。しかし直接的にはなくても, 友人や親族などの相互往来をとおして, 双方のそれ以外の成員に相手民族の情報が伝わることで, 新たな関係への道が開かれることもある。ここではとくに若い青少年と関連させて, その点をみてみよう。

表 13 は, 2006 年の調査時に家畜放牧に従事していた 10 人の青年や少年が, 4 つの近隣民族の成員を最初に自分の目で見た場所と機会, その時の推定年齢を示している。これ

30) ただしカラとニャンガトムは貧しく, 客を十分にもてなすことができない人びととして語られることもある。

31) 「敵」との友人関係を人類学的な贈与論の文脈でどのように捉えることができるのかについては, 別稿でくわしく論じた [佐川 2009c]。

らの青少年はいずれもインカベロとランダル、エレレに帰属しており、ダサネッチランドの中部から北部のオモ川周辺に暮らしている。そのため、ダサネッチの南西に隣接するガブラを目撃したものは一人もいない。この地域に住む人には、老人であってもガブラを見たことがない人が多い。また北に暮らすカラを見た青少年もいない。カラは比較的近い距離に位置しているのでこれは不可解であるが、ダサネッチはこの数年のあいだカラがダサネッチランドに来ることはまれになったと語る。ギルケは、近年交易に来たカラとダサネッチのあいだに起きたトラブルの事例を記しており、往來の停止もこのことと関係している可能性がある [Girke in press]。

それ以外の4民族は、多くの青少年がなんらかの機会に直接目にしたことがある。「われわれの人びと」であるホールは、10人中8人が初めて見た機会を覚えていないほど、交易に来ている姿を町や村で頻繁に目撃されている。残り3つの「敵」民族と遭遇した場面はさまざまである。このなかでハマルを見た二人は、敵対的な相互行為の場で遭遇している。一人は、ハマルとの戦いに行ったときに見たもの、もう一人はダサネッチの村へ小規模な襲撃 (*sulla*) に来て殺されたハマルの死体を見たものである。しかしこの2例を除けば、最初の「敵」との遭遇はいずれも交易や共住、友人訪問、平和儀礼<sup>32)</sup>など友好的な相互行為の場で起きている。

集落の日常生活でなされる表象においては、「敵」は「われわれを殺す敵」といった否定的な表象が支配的で、子供のときからこれを聞き続けていたら恐ろしい「敵」イメージが増幅される一方に思える。しかし実際には、少年時代から個人間の友好的な相互行為の現場を直接に目にすることで、その後の友好関係を形成する基盤が築かれているのである。

## V. 考察

ここまで示してきたように、民族間の友好的な関係が国家勢力の介入によって切断され、敵対的な関係にとってかわられているわけではない。そのことは年長者だけではなく、10代や20代の若者の多くも友人関係を有していること(表5)から、またインフォーマントと同世代の成員も親族関係を有していること(表9)から、明らかである。II章で触れたような集団レベルの大規模な移動は、筆者の知るかぎり19世紀末のランダルとクウォロの移動以来起きていないようだが、個人レベルの移動は今日まで継続してなされてきたのである。本章では、先行研究が提示してきた社会像と本論で示した内容に齟齬が存在している背景を考察しよう。

まず挙げるべきは、国家による政策のちがいである。松田(素)による「民族のハード化」モデルは、おもにケニアの民族間関係の事例に依拠してなされている。ケニアを植民地支配した英国政府は、間接統治を効率的に推進するために「部族領域(tribal zone)」を形成し、その内部に暮らす人びとを単一の「部族」の成員として同定した。その結果、以前に存在していた民族境界を越えた友好的な社会関係は切断され、従来の多元的かつ流動的な人びとの帰属意識は「部族主義(tribalism)」に置き換えられた [松田(素) 1999. 2000]。

それに対してエチオピアでは、数年のイタリア占領期を除いて列強による植民地支配は受けなかった。エチオピアでも19世紀末に北部のエチオピア帝国が南部の諸地域を征服し、その資源を中央政府や地方役人が収奪する疑似植民地的な体制が敷かれた [Donham & James 1986]。そして、帝国の行政区域も

32) 平和儀礼とは、戦争終結後に一方の民族が数十名単位で相手の民族の村を訪れて開かれるものである。訪問を受けた側は、家畜を殺して彼らを歓待し、その場で演説会を開き、両民族の成人男性が戦争の無意味さや平和がもたらす恩恵について主張する [佐川 2007]。

おもに民族単位に基づいて区分された。しかし、エチオピアでは英国植民地政府のような間接統治よりも北部から移住してきたアムハラ人などによる直接統治の度合いがつかかったため、ケニアほどには排他的な民族意識が強化されることはなかったといわれる [Knutsson 1969: 87-88]。ダサネッチは、このエチオピアの中でも地理的な最辺境に位置しており、その結果として今日まで民族境界を越えた友好関係が温存されてきたと考えることができる。

もっとも、横断的紐帯の持続をエチオピアの特殊性だけに起因させることは適切ではない。なぜならダサネッチは、政府による統制がより厳しかった国境を越えたケニア側のトゥルカナやガブラとも友好関係を維持しているからである。そうだとすれば、先行研究の議論構成の前提を問う必要があるだろう。その前提の一つは、国家などが国境や州境などを形成すると民族間の相互往来は自動的に途絶え、友好的な社会関係も消滅していくという前提である。たしかにそのような説明を部分的に適用することが可能なケースもある。それが顕著なのは、イタリア占領期のダサネッチとトゥルカナの関係であろう。この時期に両者は「イタリアの人びと」と「イギリスの人びと」として戦い、数年間にわたって友好的な相互往来は完全に途絶えた。しかしイタリアが撤退すると、まもなく両者は自発的に友好的な相互往来を再開し、新たに友人や親族関係を形成した。

別の例も示しておこう。エチオピア、ケニア、スーダン三国国境地域に位置するイレミ地域は、かつてダサネッチやトゥルカナ、ニャンガトムが放牧地として利用していた。しかし英国植民地政府は、そこにイレミ・アペンディックス (Ilemi Appendix) と呼ばれる無人地帯を設けて放牧を制限し、1942年終りには、アペンディックス内に軍事ポ

ストを設けて管理をおこなった<sup>33)</sup>。その結果、この地を利用していた民族間には放牧地をめぐる対立が激化したといわれる [Tornay 1993: 157-160]。しかし、ダサネッチによれば、この禁止以降もイレミ地域での放牧は密かにおこなわれていた。その際には政府役人の監視を逃れるために、トゥルカナと家畜群を一つにまとめるなどの協力をおこない、それを契機に両者に友人関係が生まれたといわれる。外部勢力による恣意的な境界の形成は、民族境界を越えた新たな友好関係を形成する契機としても作用してきたのである。

もう一つの前提は、町が建設されたり市場が定期的にかかれるようになることで外部から大量の財が流入すれば、民族境界を越えたモノのやりとりは衰退していくという考えである。また町や市場だけではなく、援助機関による食糧配給が民族間の友好的なネットワーク形成を阻害する要因になると述べる論者もいる [Tadesse 2005]。この前提も部分的には正しい。ソバニアによれば、19世紀半ばにダサネッチは近隣民族から土器、槍やナイフなどの鉄製品、コーヒー豆などを入手していた [Sobania 1980]。しかし今日、土器は町で売られている鍋に急速にかわられつつある。また現在では鉄製品を加工する技術がダサネッチに伝わり、ダサネッチの職人が存在しているだけではなく、ナイフなどは町で容易に購入できる。さらに、1974年に成立した社会主義政権によってコーヒー豆の国内流通は制限されたため、ダサネッチは1980年代初め以降、町で購入可能なコーヒーの殻を利用している [Sagawa 2006]。

しかし人びとは町で購入した財を、しばしば民族境界を越えた物々交換や贈与に利用している。とくに国境を越えたやり取りはさかんで、たとえば、ダサネッチはケニア側の町でしか購入できない質の高い鍋やビーズを、エチオピア側でしか購入できない酒と交換に

33) イレミ・アペンディックスの歴史は、以下の論考を参照 [Mburu 2003]。

得ている。またニャンガトムが暮らす地域には小さな町しか存在しておらず、物価も高いため、ダサネッチはオモラテの町で購入したコーヒーの殻や酒を交易品や贈与財として用いている。それに対してニャンガトムは、スーダンのトポサから得た銃や弾薬を売ったり贈与したりする(表4, 表8)。町にもたらされた財はこれまでの民族境界を越えたモノのやりとりを代替すると同時に、それを新たに活性化する役割も果たしているのである。

## VI. おわりに

東アフリカ牧畜社会の民族間関係を対象とした先行研究では、民族境界を越えた友好関係の存在が指摘されてきたものの、それは植民地化以前の時代に存在したものであり、国家勢力との接触以後にその関係は消滅に向かっていくという議論が支配的であった。それに対して本論では、より実証的なデータに基づいて今まで横断的紐帯が持続していることを明らかにした。国家勢力の介入により、民族間の敵対関係が強化され、また友好関係が形成される背景に変化が生じたことは確かだが、それにより横断的紐帯が一律的に切断されたという認識は不適切である。

本論で横断的紐帯の持続を明らかにしたことで、二つの新たな問題が浮上してくる。一つは、近年対象地域で本格化しつつある外部アクターによる平和構築介入と関係した問題である[佐川 2007]。1990年代から国連などの場で平和構築をめぐる議論が盛んになったが、その動きがこの地域にまで及んでいる。

その一方で、近年エチオピアではエスノ・ナショナリズムが勃興している。1991年に暫定的に成立した新政権は、それまでのアムハラ人中心の中央集権体制にかわって民族連邦制と地方分権化の政策を推進し、行政単位は民族集団単位で区分されることが多くなった。1995年に発布された憲法では、「民族(Nations, Nationalities and Peoples)」の自

決権が保障され、要求があればその分離独立までもが認められている。その結果、異なる民族間の行政区域の境界をめぐる争いや、同一行政区内における政治的役職をめぐる対立が深刻になりつつあることが、エチオピア各地から報告されている[Turton 2006 など]。この動きは、エチオピアの最周縁地域に位置するオモ川下流地域にも広がりつつある。

このエスノ・ナショナリズムの勃興は、民族間紛争への介入がどのようにおこなわれるべきかについてつよい含意を有している。ナショナリズムを「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理」[ゲルナー 2000: 1]として定義し、さらに異なる政治的/民族的な単位は相互に明確な空間的境界で区分されるべきであるという国民国家的/定住民中心的な発想[cf. Barth 1992]を想起すれば、異なる民族に帰属する成員間の共住や相互往来、そこから生まれる友好的な社会関係はその原理からの逸脱としてしか捉えられない。そしてそのような原理から導出される民族間紛争を解決するための第一の方策とは、民族境界を越えた相互往来や社会関係を遮断することであろう。

しかし、本論では十分に触れることができなかったが、横断的紐帯は戦争後に民族間が平和を回復する過程で重要な役割を果たしてきた。戦闘が終わっても、両者のあいだには敵対的な関係が支配的なままである。この民族レベルでは敵対関係が支配的なときに、「敵」との親密な個人的関係を有した成員が率先して相互往来を再開することで、ほかの人びともそれに追従して相互往来を再開し、新たな友人関係や親族関係も形成されていく。

この文脈において、民族境界を越えた友好関係が持続している状況を強調する必要がある。ナショナリズム的な発想に基づいた介入によって、そのような関係が一度完全に切断されてしまえば、なんらかのきっかけで暴力的紛争が発生したあとに友好関係を回復

していくことはより困難となるであろう。適切な介入のあり方を探るためには、この持続してきた関係をいかに活用すれば、紛争抑止や平和回復を達成することができるのかを問う必要がある。

もう一つは、この地域の民族間関係を総合的に捉えるための視点に関係した問題である。本論から明らかになったのは、敵対と友好を二者択一的な関係形態、つまり歴史的に一方の関係から他方の関係へ不可逆的に変化してしまうものとして捉える枠組みが不適切だという点である。なぜなら、ダサネッチと近隣民族は、国家勢力との接触以前から敵対的、友好的な相互行為の双方を重ねてきたし、また国家勢力との接触以後は、敵対関係を激化させるような介入を受け続けてきたにもかかわらず、今日まで友好的な社会関係を維持し続けてきたからである。

そのことを考えれば、この地域の民族間関係は、一方の関係が支配的な状態から他方が支配的な状態へ、そしてまた他方から一方へと揺れ動く、振り子状のものとして捉えることがより適切だろう [cf. リーチ 1987]。実際ナイトンは、ウガンダ北東部のカリモジョンと近隣民族との関係は、戦いが激化する時期と相対的に平和的な関係が保たれる時期を歴史的にくり返してきたことを指摘しているし [Knighton 2003: 436]、河合 [2004: 562] も同じくウガンダ北東部の農牧民ドドスと近隣民族の関係を、「敵対と許容ないし友好という相反する関係があいついで継起し続ける状況」として特徴づけている。

ダサネッチと近隣民族との関係も、同様の視点から分析する必要がある。たとえばV章で触れた、イタリア占領期には戦いを重ねたダサネッチとトゥルカナが、その後インレミ地域で政府からの放牧規制に対抗するために協力関係を形成した事例は、そのような動態的関係の好例である。それぞれが帰属する国家勢力間の敵対関係が最高潮に達したときには、両者の友好的な相互往来も途絶えざる

を得なかったが、敵対関係がゆるんだ途端に、人びとは自発的に双方の土地への訪問を再開してきた。そして、そのような視点から検討されるべきは、なぜ関係が一方に固定化してしまわずに、敵対から友好へ、そしてまた友好から敵対へという移行がくり返されるのか、そしてその動態を生み出す駆動力はなんなのか、という問いである。

現段階で筆者は、ダサネッチと近隣民族が、不確実な環境下で広大な土地を家畜と頻繁に移動するという生活様式を共有していることとともに、I章で触れたようにダサネッチと近隣民族が「家畜の人びと」としてのつよい自己意識をも共有していることが、関係の動態に重要な役割を果たしていると推測している。そして、この地域の牧畜集団には民族境界を越えて「家畜の人びと」としての「強固な共同社会意識 (a strong feeling of community)」[フォーテス & エヴァンズ＝プリチャード 1972: 42] が存在していると考えている。この推測に関する議論を深めることが、つぎの課題となる。

## 謝辞

本論は、筆者が2009年に京都大学に提出した学位申請論文の第5章1～2節に加筆・修正を加えたものです。エチオピアでの現地調査は、21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」によって可能になりました。資料整理の過程では、「龍谷大学アフラシア平和開発研究センター公募研究員」としての研究費を利用させていただきました。また論文執筆の過程では、太田至先生（京都大学）から多くの貴重なご指摘をいただきました。みなさまにこの場を借りてお礼申し上げます。

## 参 考 文 献

## ●日本語文献●

- 伊谷純一郎 1995. 「ケニア遊牧民の潜在的農耕」『アフリカと熱帯圏の農耕文化』（渡部忠世監修），pp. 19-40，大明堂。
- 太田 至 1986. 「トゥルカナ族の互酬性」『自然社会の人類学』（伊谷純一郎・田中二郎編），pp. 181-215，アカデミア出版会。
- 河合香吏 2002. 「『敵』の実体化過程——ドスにおけるレイディングと他者表象」『アフリカレポート』35: 3-8。
- 2004. 「ドスにおける家畜の略奪と隣接集団間の関係」『遊動民』（田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編），pp. 542-566，昭和堂。
- ゲルナー，アーネスト 2000. 『民族とナショナリズム』加藤節監訳，岩波書店。
- 佐川 徹 2007. 「北東アフリカ紛争多発地域の平和構築に向けて——外部介入による牧畜民間の平和会合」『アフリカ研究』71: 41-50。
- 2009a. 「東アフリカ牧畜社会の地域紛争と近年の変化」『海外事情』57(5): 37-53。
- 2009b. 『東アフリカ牧畜社会における戦争と平和の動態——エチオピア西南部ダサネッチの民族間関係』，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科学学位申請論文。
- 2009c. 『友を待つ——ダサネッチによる「敵」への歓待と贈与（Kyoto Working Papers on Area Studies No. 48）』，京都大学東南アジア研究所。
- 2009d. 「臆病者になる経験——ダサネッチの戦争と自己決定」『アジア・アフリカ地域研究』9(1): 30-64。
- 富川盛道 1966. 「Datoga 族の地域集団——東アフリカの牧畜社会における部族関係」『人間』（川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編），pp. 465-526，中央公論社。
- フォーテス，メイヤー&エドワード・エヴァンズ=プリチャード 1972. 「序論」『アフリカの伝統的政治体系』（メイヤー・フォーテス&エドワード・エヴァンズ=プリチャード編，大森元吉・星昭訳），pp. 19-43，みすず書房。
- 松田 凡 1988. 「オモ川下流低地の河岸堤防農耕——エチオピア西南部カロの集約的農法」『アフリカ研究』32: 45-67。
- 2003. 「交換を促す『地域の力』」『持続的農業農村の展望』（祖田修監修），pp. 324-340，大明堂。
- 松田素二 1999. 『抵抗する都市——ナイロビ移民の世界から』，岩波書店。
- 2000. 「日常的民族紛争と超民族化現象——ケニアにおける1997~98年の民族間

- 抗争事件から」『現代アフリカの紛争』（武内進一編），pp. 55-100，アジア経済研究所。
- 宮脇幸生 2006. 『辺境の想像力——エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール』，世界思想社。
- リーチ，エドモンド 1987. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳，弘文堂。

## ●英語文献●

- Abbink, J. 2005. "Of Snake and Cattle: Dialectics of Group-Esteem between Suri and Dizi in Southwest Ethiopia." *The Perils of Face* (I. Strecker, ed.), pp. 233-252, Münster: LIT verlag.
- Almagor, U. 1978. *Pastoral Partners: Affinity and Bond Partnership among the Dassanetch of South-West Ethiopia*. Manchester: Manchester University Press.
- Ayalew, G. 1997. "Arbore Inter-Tribal Relations: An Historical Account." *Pastoralists, Ethnicity and the State in Ethiopia* (R. Hogg, ed.), pp. 143-167. London: Haan.
- Barth, F. 1992. "Towards Greater Naturalism in Conceptualizing Societies." *Conceptualizing Society* (A. Kuper, ed.), pp. 17-33. London: Routledge.
- Broch-Due, V. 2005. "Violence and Belonging: Analytical Reflections." *Violence and Belonging* (V. Broch-Due, ed.), pp. 1-40. New York: Routledge.
- Carr, J. C. 1977. *Pastoralism in Crisis: The Dasanetch and their Ethiopian Lands*. Chicago: The University of Chicago.
- Donham, D. and W. James eds. 1986. *The Southern Marches of Imperial Ethiopia: Essays in History and Social Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans-Pritchard, E. E. 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford: Clarendon Press.
- Fukui, K. 1994. "Conflict and Ethnic Interaction: The Mela and their Neighbours." *Ethnicity and Conflict in the Horn of Africa* (Fukui, K & J. Markakis, eds.), pp. 33-47. London: James Currey.
- Gerke, F. in press. "The Discursive Life of Bondfriendship and Cultural Neighborhood in South Omo." *To Live with Others* (E. C. Gabbert & S. Thubauville, eds.) Köln: Köppe.
- Gluckman, M. 1956. *Custom and Conflict in Africa*. Oxford: Basil Blackwell.
- Goldschmidt, W. 1971. "Independences as an Element in Pastoral Social Systems."

- Anthropological Quarterly* 44(3): 132-142.
- Hathaway, T. 2009. *Facing Gibe 3 Dam: Indigenous Communalities of Ethiopia's Lower Omo Valley*. International Rivers.
- Herskovits, M. J. 1926. "The Cattle Complex in East Africa." *American Anthropologist* 28: 230-272. 361-388. 499-528. 633-634.
- Hickey, D. C. 1984. *Ethiopia and Great Britain: Political Conflict in the Southern Borderlands, 1916-1935*. Ph.D Thesis. Northwestern University.
- Knighton, B. 2003. "The State as Raider among the Karamojong: 'Where There Are no Guns, They Use the Threat of Guns'." *Africa* 73(3): 427-455.
- Knutsson, K. E. 1969. "Dichotomization and Integration: Aspects of Inter-Ethnic Relations in Southern Ethiopia." *Ethnic Groups and Boundaries* (F. Barth, eds.), pp. 86-100. London: Allen and Unwin.
- Kurimoto, E. 1998. "Resonance of Age Systems in Southwestern Sudan." *Conflict, Age and Power in North East Africa* (Kurimoto, E. & S. Simonse, eds.), pp. 29-50. Oxford: James Currey.
- Kurimoto, E. and S. Simonse eds. 1998. *Conflict, Age and Power in North East Africa*. Oxford: James Currey
- Lamphear, J. 1993. "Aspects of Becoming Turkana." *Being Maasai* (T. Spear & R. Waller, eds.), pp. 87-104. London: James Currey.
- Lewis, I. 1961. *Pastoral Democracy*. London: LMI International.
- Mburu, N. 2003. "Delimitation of the Elastic Ilemi Triangle: Pastoral Conflicts and Official Indifference in the Horn of Africa." *African Studies Quarterly (The online journal for African studies)* 6(4).
- Population Census Commission 2008. *Summary and Statistical Report of the 2007 Population and Housing Census: Population Size by Age and Sex*. Addis Ababa: UNFPA.
- Sagawa, T. 2006. "Wives' Domestic and Political Activities at Home: The Space of Coffee Drinking among the Daasanetch of Southwestern Ethiopia." *African Study Monographs* 27-2: 63-86.
- Schlee, G. 1989. *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*. Manchester: Manchester University Press.
- . 1997. "Cross-cutting Ties and Interethnic Conflict: The Example of Gabbra Oromo and Rendille." *Ethiopia in Broader Perspective, Vol. II* (Fukui, K., Kurimoto, E. & Shigeta, M., eds.), pp. 577-596. Kyoto: Showado.
- Scoones, I. ed. 1994. *Living with Uncertainty: New Directions in Pastoral Development in Africa*. London: Intermediate Technology Publications.
- Sobania, N. 1980. *The Historical Tradition of the Peoples of the Eastern Lake Turkana Basin c.1840-1925*. Ph.D Thesis, University of London.
- . 1991. "Feasts, Famines and Friend." *Herders, Warriors and Traders* (J. Galaty & P. Bonte, eds.), pp. 118-142. Boulder. Westview Press.
- Spencer, P. 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge & Kegan Paul.
- . 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and Growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.
- . 1998. *The Pastoral Continuum: The Marginalization of Tradition in East Africa*. Oxford: Clarendon Press.
- Tadesse, W. 2005. "Having Friends Everywhere: The Case of the Gamu and Hor." *The Perils of Face* (I. Strecker, ed.), pp. 297-315. Münster: LIT verlag.
- Tornay, S. 1993. "More Chances on the Fringe of the State? The Growing Power of the Nyangatom" *Conflict in the Horn of Africa* (T. Tvedt, ed.), pp. 143-163. Uppsala: Uppsala University.
- Turton, D. ed. 2006. *Ethnic Federalism*. Oxford: James Currey.

原稿受領日—2009年7月23日